

町民参加の町史づくり



竹富町史だより

2003・9・30

第24号



竹富町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地
TEL・FAX兼用(0980)82-9985

目 次

竹富町史第十一巻資料編「新聞集成V」を発刊

〔資料紹介〕

波照間島の歴史・伝説考（二）

『写真に見るわが町』

22

高等弁務官の贈り物

...

『文化財探訪』

18

下田原貝塚

...

『聖地めぐり』

21

美底御嶽

...

収蔵図書紹介

...

業務日誌

...

編集後記

40

36

34

33

32

31

2

1

●表紙の写真●

西表青年学校船浮分校の生徒と教官のみなさん。1940年(昭和15)頃に撮られた写真である。青年学校は1935年(昭和10)4月、「青年学校令」公布によって従来の実業補習学校と青年訓練所が統合して誕生した教育機関。当時の軍国主義の風潮と産業構造に対応するように設置された。創立当初は小学校に附属したが、後に義務教育となり、勤労青年のための定期制教育として組織された。1942年(昭和17)には校長以下全職員が専任教師に任命された。西表島西部の南西奥にある船浮には分校があり、青年教育が施された。

竹富町史第十一巻資料編「新聞集成V」を発刊

—明治二〇年代初・中期を知る貴重な資料—

竹富町の昭和三十年代の初・中期を知る町史第十一巻「新聞集成V」を、今年三月末日に発刊しました。本巻は昭和三十一年から同三十五年までの竹富町に関する新聞記事を収録したもので、当時の政治・経済・文化・教育等を詳らかに知

ることができ、島々の社会世相及び人々の暮らしを浮き彫りにしています。

八重山の戦後社会は、昭和三十年代に入ると落ち着きを見せ、世情は安定してきました。しかし、政治的には“白黒闘争”が激しく、立法院議員選挙、町長選挙、町議会議員選挙になると、民主党、社大党に分かれ、激しい集票合戦を展開しました。



発刊した竹富町史第11巻資料編「新聞集成V」

経済面では、当時、町最大の懸案である西表島開発に向けて日米両政府、大学等を巻き込んで様々な調査を実施しています。

その中でも西表

島日本政府農業資源調査団と米スタンフォード大学のスタンフォード研究所による調査は大がかりなもので、水資源、入植農、農業土木、園芸、土壤、林業資源、土木事業などの多岐にわたりました。

本巻には戦後八重山で発行された『海南時報』、『八重山タイムス』、『八重山毎日新聞』、『八重山新報』の四紙の記事の中から竹富町に関する記事を精選して収録しました。これらの新聞の原紙は県立図書館八重山分館に保管されており、その新聞のマイクロフィルム複製本が関係機関に所蔵されています。本巻の発刊に際しては、石垣市立図書館が所蔵する複製本を用い、編集作業を行いました。収録記事は一四四八件に上り、多彩です。

本巻に収録されている記事数は、戦後編の最初となつた「新聞集成IV」に比べ、少なくなっていますが、一記事あたりの文字数が多く、かなり細部にわたり書き込んでいる記事もあります。記事の中で島々の住民の暮らしぶりを知るルポルタージュは資料的価値が十分にあります。

波照間の歴史・伝説考(二)

—仲本信幸遺稿集—

神行事改革の伝説

波照間にある三カ所の拝所の創始は、先に示した三兄弟によつてなされたのであるが、創始以来司が任命されて行事はなされていたものの、祭典の行事次第や順序が一定せず、その為祭典挙行に不都合が多く苦労していたのである。

そこで、比田大母（ビタブーバー）という神媒を受けた人が、神靈を受けて諸神行事の制定を試みられたが、この人の娘に川平大母がいて、母の定めたものを廃止する試みをやってみて、その結果を見て本決定したことである。

波照間に遺る神行事の次第は、この人の定めたもので、以後この親子が神として住民に畏敬され、二人を葬った墓が田原（タバレー）の本比田家の畑の中に西向きに造られている。昭和一二、三年頃、この比田大母が私の夢の中に現れて、自分の墓の前に大石が南北に横たわっていて出入りの邪魔をしているから、それを除くようにとの知らせとともに、墓の内部の様子を示されたので、翌朝早速参拝して見たら、この大石は夢に現れたのと全く同じであつた。

そこで門中会議を起こして、吉日を決めてこの大石を取り除くことを決め、この邪魔石を割つて取り去るついでに墓内の掃除を決行したが、墓内も夢に示された通り全く相違ないことに驚きと敬意を示して、内蔵されていた遺品によつて年代を推定するよう注目した。

遺骨は伝えられていた通り親子二人だけで、遺骨は消滅せず残つており、甕はパナリ焼きで、母親のものは小柄で、子の方は親より大柄に示されていた。親の方の骨には梅毒を罹患した跡が見え、子の方にはその形跡がなかつた。このことから推測するに、梅毒はこの人たちの前に南蛮貿易とともにたらされたものであろうから、この梅毒の伝来の年代を調べると、この親子の活躍した年代も推測することが出来よう。また、容器など遺品は多くないことから、当時までは種々の容器類はまだ少なかつたようである。煙草に関係あるものは皆無であつたので、この時代までは煙草はまだ入っていないことが肯かれるのである。

神行事の挙行日程については、真徳利御嶽の司が代々受け継いで挙行されており、東の四部落の司は、富嘉の司の指揮を受け、神行事を統一して行つていたのが、富嘉村が白保に移住させられたために、司も登根本もなくなつて、この行事の次第や順序が東方面の人には不明のために神行事を挙行できず困惑し、白保にて島最高の物知りの西ふた翁に教えを乞い、その指示通り挙行したら神罰を受けて逆効果となり、飢餓が続いたので、再度白保へ渡り、現新原の中にある保久盛家の畑の住人（名前も伝わつてはいたが、忘れた）を願つて、教えを乞うた。この人は、西ふた翁

が元島の人を欺いて逆に教えたことに憤慨して、懇ろに正式に教

えて貰つたので、その通り実行したら豊年が続き、島民を喜ばせ

て神行事が元通りに復活できたとの伝説である。

逆に教えた西ふたの富も理屈の富で、三代とは統かず、善導した方は、波照間任中に年貢俵（一二〇俵の米、粟を割り当て以上に超過納入）を完納して、白保へ移つてから筑登之（チクドン）に出世して、子孫代々繁昌しているとの云い伝えであるので現在の白保に福盛か福の上字のついた屋号があるか調べる必要がある。現在でも白保に、西ふたの理屈うやぎ、小浜の堅シノウのうやぎとの伝承が残つており、後者の方は現在白保にある小浜家に当たると思う。

波照間では、ニシフタは島一番の物知りで、エビや夜光貝の靈を六反帆船の船尾につけて白保へ伴つて行つたほどで、彼の屋敷には人が住めないようになり（イキロー）を掛けてあるので、そこに家を建てて住むことを忌み嫌つて今まで家は建たずに捨てられていた。石野家の人が掘つて田に使つていたが、豚小屋の跡が最近まで残つていた。

また、小浜のカタシノーは、子供たちをフルマル浜から砂を夕食前に三回運ばなければ食事を与えない程であつたとの伝えで、その屋敷の前方は現在でも砂質になつている程で細かかつたことを物語つている。

ニシフタの屋敷跡は、富嘉村の大嶺家と本比田家一統の屋敷との中間に残つており、小浜家の屋敷は西武堂村にあつて、本田貞吉君の屋敷の北側にある。

廃村復興の概要

富嘉村は島の始めから由緒ある本村であるが、強制移民によつて神行事の主宰者である登根本を廃家させたため、神罰を受けて琉球王府に不幸が続くので、早く本村の登根本家を復活させるよう王府の命を受けた役人は慌てて、東方面に登根本の子孫が残つていなか探したところ、保多盛家の子孫は嘉手苅であることを知つて、この人を使つて保多盛大本を立て、大嶺家の子孫は前野家に残つていることを探し、同家の子孫を派遣して大嶺家を復活させたとのことである。島本家の登根本は、どうして復活させたか伝説もなく、詳らかでない。

この登根本を助けて、神行事を行うために富嘉成本の復活の必要があり、登野城家は東の津久登野家の弟達を分家させ、垣本家は勝連家から分家、米盛家は東迎家から分家させて建てさせた。また、富嘉村は後立ての村を建てないと榮えないとのことでの流刑者仲本愛華の三男の阿良嘉が分家して西武堂村を興したのである。結局この六名によつて本村が再興されたのであるが、この六軒では神行事が出来ないので、行事がある度に東の村より人数を配つて神行事を行つていたが、明治三四、五年頃になつて札人（一五歳～四九歳までの男子）が二十人に達したので、単独で行事を施行することができて、東方面的援助は不要になつたとのことである。私共酉年生まれの三名が札人に加わつて二十五名に達したのが明治四四年で、その頃から神行事をするに少々楽になつたのである。

目的地に安着しないで横道にそれるので、中国で易者に占いさせたところ、波照間島の船本の登根本を廃家にさせて、船旅の祈願を怠つたため神罰で航海が順調に行かないでの、早く船本を復興させなければならないとのことでしたので、帰つて首里王府へ伝えたところ、その家を早く復興せよとの嚴命が役人に下されて、役人がその子孫を捜したら、田島家の後の家がガバラ引き(血統)で、本比田の船元の子孫であることが判明し、島中に各戸から垂木一本を供出するよう指令して、住んでいた家を崩して運び、島中の人が挙村一致で建てて、本比田家の船元を復活したことになつていて。

波照間は神の崇高な島であると群島内に知れ渡つてゐる所以は、これまで述べたことがよく示してゐる。

住家の屋敷跡について

波照間島内に太古より近代にかけて、人間の住んだ跡の古屋敷が方々にあり、二十カ所近くも残つてゐることから、古くから人が住んでいたことが分かるが、耕地の面積等から現在よりも小数の集団であつたことが窺われる。

昔から地名を名取つてそこの住人を表したであろうことは、明治になつて平民も姓名を付与された歴史で示されている。大昔からあつて、現在の姓名と関係のある地名では、下地村跡にある屋敷と前村の東南方にあつたチチ村跡とわずかばかりの関連がある

だけである。近世になつて、白保と大浜に分村した方の屋敷と現在ある姓名と関係あるものを知つてゐるだけ後世のため記述する。

白保との関係がある富嘉部落付近では、屋敷や墓と関連して東川平・西川平・金嶺・西ナタ・東ナタは白保で何と呼ばれているが不明であるが、おそらく長田であろう。本比田は不明であり、保多盛は廃家のようである。米盛系統は多いようである。その他、古屋敷は多いのであるが、不明のようであり墓の在り方から推して内原、田盛・松本・大泊等が関係があるようである。富嘉後村では、小浜・島仲・山田・南風本等の屋敷からして多いようである。

新武地村との関係は、嘉良・山里・桑原・田島等があり、屋敷跡や墓から推して他にも多いようである。平地村にはピラチの他に数戸あり、ミンビケ村にも数戸の屋敷があり、とにかく四二〇人余が移住しているので、一戸六人平均とみて七〇戸以上が移住しているのである。

大浜に移住した人は、平地村より東、前部落の前野家の西の道より西側が当たられ、現在の大浜に同姓が多いのである。この同姓の主なるものに慶田盛・上間・本若・石野・前津・前盛、その他、古屋敷の名にちなんで考えると多いようである。

大浜にも四二〇人位が移住しているので、一戸五人平均として八〇戸以上(六人平均で七〇戸)が移住したので、白保と大浜を合わせて八四〇人となり、島の人口の半分以上が石垣島に強制移住させられたのである。何故に前野家の西の道を境にして移住を命じたのかと言うと、当時の首里大屋の妻(賄婦)が東の部落

から求められたので、その姿にひいきして西方を移したので、西方には本村（富嘉成本）があつて移動させるべきでないものを、廃村にしたために、後で富嘉の登根本を復活させる問題を抱えることになるのである。

波照間島の廃村

波照間島に人間が初めて移り住んだ年代は詳かでなく、何処から来たかも不明であるが、言語の母音や単語が大和民族と大同小異であることから考へると、大和民族と同族であることは相違ないと言える。

最初に移り住んだのはフタナロ（神の口という）より入船して大泊浜に着き、浜の方の崖の下の湧水（ケーラの水という）を頼つて上陸し、下田原付近の水源を利用してその場所を生活の本拠と定め、村落を形成したのが島の発祥地になつたことは付近に残る貝塚や城壁がこれを証明している。

その年代は詳かではないが、私は下田原の崖の下や洞穴内に人骨が残つているのを見ると、祖先崇拜の信仰以前であろうと推測される。また、於茂登照彦の神の妹がこの地の高台に下つて、五穀の種を配給し、下八重山と称えたとの伝説から、農業の始まる時代より先に遙か彼方のニライカナイから渡來したであろうと推測される。

この部落が繁栄したので、東方面へ水を頼つて分村し、西方へも同様に分殖したであろうと思われる。どこの村落がいつ頃まで

存続したかは不明であるが、下田原の東高台に外敵防衛のために城壁を築いてあるのを見ると、群雄割拠時代の祖先崇拜の初め頃まで存続したと推測される。東への二ヵ所は水を頼つてであろうことはいうまでもない。このうちマチク村は、海岸に湧き出る湧水を利用したであろうが、この村が祖先崇拜前から出来ていたことは付近の遺跡から推測できるが、海岸の城壁を見ると群雄割拠時代まで存続し、さらに井戸の堀り方を見ると、後代までも残つていたことが肯かれる。

なお、保多盛家の男がこの村の女性と恋仲になり、通つた道が現在まで神道として、年三回十月タカビ、二月タカビ、五月タカビに掃除を行い、島に伝わるヤングトウもこのことを唱謡していることから、祖先崇拜の時代まで存続して廃村になつたであろう。下志村（シムシムラ）は、付近の墳墓の状態や井戸の堀り方を見ると、群雄割拠当時、マチク村より後で創立されたであろう。この村は長く存続し、白保・大浜へ移住の後まで残つていたことが窺われる。この村の住人四名が南風見へ渡り移住した伝説によると、この村は當時繁盛して、人口過密をきたしていたことを物語つており、番所（オーシャ）の屋敷跡が残つていて、その門の敷石が現在も遺つている。それを見ると昔はこの村が政治の中心になるまで栄えていたことが察せられる。

また、明和の津波後まで存続していたことの証拠は、長石（名石）部落が大浜に移住して廃村となつた後に下志村の桃盛・富底両家が長石村に移転して大石御嶽（振石盛御嶽の遙拝所）を復活して、その拝所の司の血縁を引いていることがこのことを証明し

ている。

なお、金盛家も同村から北村へ移つて、さらに現在の所に再移転している。このことは、この下志村が当時衰退して残り少なくなつていてことを実証している。衰退の原因是、島の集落の中心が中央に移り、港からも遠く、農地の関係からも生活が困難になつて、次第に島の中央部へ移転したのが原因のようである。また、この海岸沿いの村の廃村は、津波や台風時の高波の影響もあると思われる。

次に西の方へも移り住んだであろうことは、想像するに苦しくないことは、美底（ミシユク）ケーの湧水がこれを証明している。ここも年代は詳かではないが、祖先崇拜以前に移つたことを証明しているのがナーマヌフンチの洞穴内に風葬時代に棄てられたと思われる人骨のあることを見ると、そのことが窺われる所以である。この村の呼称はないが、内盛（ウチムル）と称えたであろうと推測される。この村は久しく続いたことは、屋敷跡が多いことから察せられる。

内盛按司（ウチムルアザマグ）の居城の構造が、群雄割拠時代より進歩した築城であり、祖先崇拜の後年期ではなかつたかと想像される。このことを語るのは人骨が崖下の空洞に葬られているのを見ると、祖先崇拜の初期を物語り、島本家の墓が仏教伝来以後の築造を示しているのを見ることから、この城は仏教伝来の直後につくられたであろうと推察される。この城を囲む屋敷が保多盛家の屋敷であり、その外郭に島本家の屋敷がある。現在は両方とも畠になつてゐるが、この両家の祖先がこの村の中心になつてゐる

ように思われる。

現在、島本家が新須久遙拝所の登根元になつてゐるが、真徳利御嶽の司の血統でないことが疑問であつたが、村興しの中心ではあつても、御嶽を創始した屋久与人（ヤクウンチユ）の血縁ではないために、登根元ではあるが、司の出ない謎がようやく解けたのである。

この部落跡に、油雨後最後に生まれたという新生（アラマリ）スバー墓という墳墓（メームルシー）があるが、この墳墓に豊年祭の時、保多盛家の代表と部落の代表が拌々する。この時に供えられる供物は、すべて生のものを供え、またその御下げは、生のままかむのを見ると、当人は食物を火熱で料理することを知らなかつたと考えられる。当時は偉人はその人の生まれた屋敷内か付近に葬られたので新生のパアもこの例に従い屋敷の近くに葬つたのであろう。この墳墓の造り方から推して、祖先崇拜の初期であつたと推測する。

このパーの生後、上の段丘に上がって現保多盛家の屋敷に住んだ兄妹は、天の星座からヒントを得て、四方に丸太を埋め込み、中央に大きな丸太を立て、四方の丸太桁を置き、大丸太に垂木をかけて葺いた家を造り、その下で男女の子が続々と産まれて繁昌した。家造りの型を示したこの天の星座を、島ではユザシーといふ。こうして子が産まれ栄えたので、深く考えて深（富嘉）と称し、村がなり立ち始めたので深（富嘉）成元といふとの伝説で、現在も拌々の折りには斯様に称えているのである。現在も深（富嘉）と称えるべきものが、明治時代の土地整理の役人が、字句の

解釈を誤つて「外」と命名したのは大きな犯しているのである。

この家を中心いて、周囲に広がり、西の方に延びたのが屋久村になつたのである。内盛村の住民は、台風のたびに侵害され、津波の大被害に悩まされたので、フカ成元に移転したため、この村は自然に廃村になつたのであろう。それで廃村前にあつた島本家も現在の所に移つたことが窺えるが、その時代は内盛の近くに造られた墓の規範から推して、仏教伝来のビタブーバー時代であつたことが推察される。

屋久村は次第に繁昌していたが、苛酷な年貢に耐えかねて、屋久アカマラをリーダーとして全部落民を伴い、八反帆船に年貢を積んで、順風を待つて待機していた船を奪つて南方へ逃避したことが口碑にあり、歴史研究者によつて、年代も人数もはつきりと示されている。その人数は四十数人であるが、私は屋敷跡から推して、この人数は少ないと思う。それは、屋敷跡が十五軒くらいあるので、一戸平均四名とする六十名になり、五名平均とする七十五名になるので、私が推察した七十五名が正しいようである。

阿嘉真良の屋敷跡に火の神を祀つた跡があり、現在も拌々の時には水を差して拌々することは、往時よりこの村人が火の神の信仰が深かつたことを示している。また、この屋敷の東南側下にウリガ（下り井戸）があり、雨乞いの時にフサラマーが出始めたり、仮面を納めたりすることから推して、この住民が水神を尊崇していたことも察せられる。

底田村（シユコーダムラ）：この村はどうして興ったのか、ま

たいつ頃まであつたのか記録もなく不明であるが、シコーダバーが掘つた井戸やその墓を見ると、当時女権が強く、女性の支配が強かつたことが窺われる。井戸の堀り方、墓の規範、古墳（メープルス）の存在から推察し、またマヌムレーヌイツシケーマのユンタに詠じられているのを考え合わせると、この村は祖先崇拜の初期から始まり、仏教伝来後、琉球王府による行政の弾圧が強制されるまで、今より二百数十年前まで存続したであろうと推測される。村の所在は、毛原の神道を境にして南側に屋敷跡が十数ヵ所あることから、最盛期の人口は百人近くもいたと思われる。マヌムレーヌイツケマユンタに詠まれている歌詞から、当時の生活状態が推察できる。芋も栽培されており、歌詞が石垣の言葉と波照間の言葉が併用されることから作詞者は石垣から赴任した役人であることが察せられ、かつ当時の言葉遣いも察せられる。

ナモービナ村：この村の発祥や廃村の記録もないが、村跡に残る古墓（メープルシ）や城壁、井戸の堀り方からして、かなり古くから存在し、群雄割拠の後まで続いていたであろう。屋敷跡が四十近くもあることから、最盛期には二百人以上の人口があつたことが察しられる。付近に捨捨山の跡があることから、祖先崇拜の信仰の前からあつたようで、城壁の積み方（現在もある）から時代の古さを窺え、また古墳のあり方から見ると、祖先崇拜の信仰までは続いていたであろう。拌所の存在しないことから、この村は仏教伝来、神の信仰前に消滅したように思われる。

南風見須久（ペーミスクムラ）：この村もその興亡の記録はないが、城壁の築き方や付近の古墳の状況から推察して、群雄割拠

時代にその城主（按司、波照間ではブラという）の権限内に配下として部落を形成していたようにある。このベーミスク村とナーブルビナ村の境界は明らかではないが、農耕地の争奪の範囲によつて勢力の差と部落の人員構成の差があつたであろう。古屋敷の跡や古墳のあり方から見て、ナーブルビナの方が人員構成は強かつたようである。また、ベーミスクブラとアラブチブラの賭け事の伝説からすると、このベーミスク村は米どころで、米の伝来と共に発展したことが窺われる。

水はビタケーから取つたようで、この井戸の構築は下り井戸で、下りの階段が南の方から造られており、水の需要はベーミスクの人々の為にあつたことが察せられる。

ベーミスクブラの財力が強かつたことを証明しているのが城壁が見事であり、周囲の断崖の上に、大石が積み重ねてあることである。この城壁の石垣が崩されて、道路工事のために破壊され、消えてしまつたことは、遺跡保存上遺憾至極である。

先に述べたナーボルビナ村の住民はどこから用水を得たかといふことであるが、それはスクナーバリケーとフタビチケーの二所からであろう。この二つとも昔は下り井戸（ウリカ）であつたのである。

明和の大津波（一七七一年）後、白保へ四百十九名強制移住させられたために廃村になつたのは、富嘉成元・富嘉後村・新武知村（アラブチムラ）・平地村（ビラチムラ）の四村であるが、いずれも古くから存在したであろうことは、その屋敷や付近に古墳があることから窺うことができる。特に富嘉後村と新武知村には

富豪や偉人（アラブチブラ）が多かつた跡が残つている。

長石村並びに前村の過半数（前野家の西の道路以西）と（村名不詳）から大浜へ、四百二十一名が強制移住させられて廃村になつたのであるが、長石村に屋敷内に首里殿内の名称と同じ名称の方が葬られていることから、この村は首里方面から來島した人々が創始したのではないかとの疑問がある。なお、カンチアザマグの城内に火の神の祭事の跡が残つており、アザマグが城内城壁に葬られ、また、その城の周辺の井戸が下りガードになつてゐる。この火の神の跡から推察して、この村はかなり古くから存在したことが分かる。この城から以西に村の跡が多いが、この村の名称を忘れてゐるので、これを究めるよう希望する。

ナーヌシ－村：この村の歴史の記録も同様であるが、伝説によると、ウヤマシアカタナが与那国（与那國）の鬼虎征伐の後、与那国からマザムン（幽靈）が多数押し掛けアカタナの命を狙つたが、アカタナは自分の家の周囲を網で巻き、自分は中城の夜業屋（ブナビヤー）の多数の人々の中に隠れたために、幽靈は目的を果たせず、引き揚げる途中にナーヌシ－村に侵入し、寝てゐる住民の目玉を片つ端から抜いて皆殺しにして与那国へ帰つたため、村は全滅したとの伝説がある。

私はこの伝説は信じがたいが、何か悪性の伝染病（悪性インフルエンザの如き）の流行によつて全滅したであろうと思う。

この村の跡が、金盛家の東の道を西の境にして、現公民館の北の道を南の境に、現学校の敷地（運動場）の東方を境とし、北方は北部落のイナマ道に至る広い範囲に存在した跡があるので、五

十戸以上の人人が住んでおり、この伝説から推定すると、今から四百年以前のことであろうと思う。

チ村：この村は、白アリに追われて、大浜村へ強制移住させられ廃村となつた長石村や前村の西方へぼつぼつと移住したため、廃村となつたとの伝説であるが、廃村になつたのは今から百数十年前と推測される。この村の位置は、現前部落の南東方、南部落の南西方で、屋敷跡がそのまま残つてゐる。この村の境界は南部落の南より西は前津家の前の道路に通する大通りであるが、さらく北上して島の中央道路を北境にしたかは不明であるが、おそらく南の大通りを境界にしたであろう。そうすると十戸以下の小さい村であつたと思われる。残る屋敷の地主も旧家が握つてゐる。

ユナチ村：この村は、現前部落の前の台地に存在した形跡が残

つてゐる。この村跡の南西側にある洞穴内に人骨が累積しているが、これに関する伝説は、この村にユナチマヤという力の勝れた人物がいて、自分に敵対する人を殺害して、この洞穴に投げ入れたことである。私は太古の穴葬時代に村の死人を葬つたであろうと推察している。なお、ユナチマヤの力が抜群であつたことを証明しているのが、ペーバタ村の境にある弓矢の戦いに備えて並べられた大石がこれを証明している。

ユナチマヤが、この石の穴から打ち込んだ矢で、カンチアザマグが死んだとの伝説があるのは、この両雄の勢力争いが激しかつたことを物語つてゐる。この村は、火の神信仰時代早く廃村にな

つたであろうことは付近の遺跡がよく証明している。

ペーバタ村：この村は、現保久盛家の西方に延びた旧部落であつて、伝説に南方へ移住した島民が、彼の地に漂着した波照間島民に「ビタの前ぬ長福木（ナーフコン）」はあるか。ペーバタ村の平ガザマニ（ビサガザマニ）はあるか」との間に、「ビタの前のナーフコンはないが、ペーバタ村の平ガザマニは現在でもある」と答えたとのことである。このガジュマルは大正二年の初夏に、島を襲つた未曾有の大台風で枝が全部もぎ取られて、幹だけ残り、とうとう枯れてなくなつてゐる。

この村は、祖先崇拜が広まらないうちに消えたであろうことは、周囲の遺跡がこれを証明している。

前部落の前の凹地を越えた高台地に、村落の跡があるが、この伝説を聞いていないので省略するが、後世の学徒によつて究明するよう希望する。

アツタヌシイ村：この村もその興村廃村の歴史は詳らかではないが、廃村の伝説によつて侵犯されたとか、また白アリに追われたとの説がある。

私は、この村もナースシイ村と同様、悪疫の流行によつて廃村に追い込まれたものと推察している。この村の興りは太古であると思われるのは、この村の台地の先端に、昔北斗七星を見行つたという座席の跡が今も残つてゐるからである。遺跡（屋敷跡）から見て、可成り大きな村であつたようである。井戸の造りからすると、近年まで存続したであろう。

東方面には、小部落が点在していたであろうが、長続きせず、

西北方の如く立地条件に恵まれない為、繁栄は望めなかつたであろう。

波照間島には、昔、群雄割拠時代に島内の要所に城を築造した跡が残つてゐるが、例えばヨーブス（島では武士のことをブスといふ）が城壁を張り回した跡が二、三カ所に残つており、東方面にも白原御嶽の東下二段地にも三、四カ所の城跡が残されている。

また、女尊男卑の風習が続いていたのを証明しているのが、各所の遺跡にそこに割拠していた女傑の名が示されていることがある。例えば、キバー・バー、ペーピサマバー・シムシバー・アラマリヌバー・ピタブーバー・カビラブーバー・ヤマダブーバー等多くの女傑の名が各所にあつて、権力を争つていてことを示している。その所在地の環境によつて、その権力の強弱、維持期間に长短があり、その居所の付近に人骨が出るのも当然で疑うところないものである。

ミービケ村の記録を追加すると、この村は、ピラチ村やアラブ

チ村の続きであつたであろうことは屋敷跡で窺われる。この村の南方にミニビケーカーやバッケーケの二つの井戸があり、ミニビケーカーは近代的な造り方をしていて、津波の後で僅か（屋敷跡は六、七軒）の村人によつて掘られたであろう。この村は、近代になつてから廃村になつたであろうことは、本比田儀佐（現世帯主、八四歳）の祖父の若いときには、この村のミニビケーカーのナビであつたことから推して、今から一四〇年前まで存続したであろう。村の興りは、白保の移住後、この周囲の土地の優秀さに魅せられて、他から移住したであろう。なお、波照間

のチョウガ節の歌詞にこの村のことが詠まれてゐることからみると、この村は往時裕福であつたことが察しられる。

以上概説したように、波照間島は人間の生活環境、特に保健衛生面での環境に適していいたため、太古より人間が繁栄して人口過密で、島内至る所開墾され、耕作された跡があり、各所に村落が形成された。また、島外への移住では、西表島がほとんどで、南風見・鹿川・崎山・祖納で明和の津波後に白保・大浜へ八八〇人余も移住している。

なお、油雨の伝説が、島の人口過密ぶりを伝えるように、人口が多いために陸には地割（パカ）、海にも区画（パカ）を区切つて生活していたことを立証しているのは、神の信仰に至るまで厳重に規定されていることである。

波照間に伝わる祈祷と呪術の概要

波照間の住民は古来信仰心が深かつたために祈祷詞（パン）が多く伝えられ、呪術も多く伝えられている。神仏の信仰の時には祈祷が重要視され、呪術は護身術として、よく用いられてきた。現代は科学文明が長足の発展をとげ、科学万能の世相に変容したため、これらの祈祷詞や呪術は忘却されつつあるが、祖先の残した文化遺産の一つであり、私が記憶していることを記録して残したいと思う。

祈祷詞（パン）は古来の伝統によるものであるが、呪術は島古來の伝統と他から取り入れたものの二通りあるようで、他からの

移入の大元は弘法大師が始まりで、宮崎・鹿児島より大島を経て沖縄に入ったものであるが、さらに沖縄本島から来島した人によって伝授されたようであり、呪いを解くために呪詞の後には南無阿弥陀仏を三回称え、呪うときには呪詞の後にアビラウテンソワ力を三回称えるようである。

祈祷詞を波照間では「パン」というのであるが、このパンを始める前に、「オオシャレートート」の言葉を出すのであるが、この「オオシャレー」は、神仏の前に伏して最敬意を表す言葉であるので、これを使つたら必ず願解けの必要があるので、やたら使うことを慎まねばならない。「トート」はお願ひの表示の言葉である。

波照間には古くから伝承されている祈祷詞も多くあつたが、老年になつて記憶力が鈍つて大分忘れて残り少ないが、この残つた分だけでも後世のために書き直すことにした。

土公神への祈祷について：屋敷を守る土公神については「二十五間真角（マハコウ）にオオル大土ウヤン、小土のウヤン」と称える。波照間では、神の信仰は仏教より遅れているために、大土公神・小土公神と称るべきものを、何事の祈りにも祖靈を尊ぶことを優先するために、神に称るべきもの「ウヤン」と称れるようになつてゐる。

墓の土公神の称え方：二間半真角（マハコウ）にオオル大土公神、小土公神」と称えるべきで、ウヤンは意味をなさない。

豚小屋の土公神についても、墓と同様に称える。沖縄では豚小屋を守る神をフルの神と称え、波照間では水豚を守るウヤンと称

える。祈祷の場合には、土公神の名をあげて、その後で目的の場所の名、例えば豚小屋のときはフルまたは水豚と称えればよい。

門を守る神：この神は、門の角の両側におられるので「左の役場を守りおおる御門（オオジヨウ）の神、右の役場を護りおおる神」と称えればよいが、波照間でいうウヤンと称えててもよい。

新家屋の落成式の祈祷詞は、現代の若人達にも普及されており、ジラバ・ユスパレ等も同様であるので、ここは省略する。

船玉（船靈？）の神への祈祷詞（パン）：これは弘法大師が传授したといわれるものが宮崎あたりから鹿児島・大島を経て沖縄へ伝えられ、さらに波照間へも伝わつたもので、その間に、趣旨は違わないが、祈祷の詞は大分違つていたようである。私は、宮崎の殿様の船大工の子孫で、石垣で造船業を営んだ井上氏から、同家に伝わる委しい記録を写し持つていたが、この記録が紛失してしまつて、委しく記述することは出来ないが、私が簡略化して祈祷していたものを記述する。

船玉（靈？）の神は十二名おられて、各々持ち前の職責が当たられ、神名が付されているのである。總代表名が、船玉大明神猿田彦の神であり、それだけ称えても祈願は通るのであるが、口を守る神は大星の神で、船首を守る神は見通しの神であり、外に十名神に大柱・大帆、小柱・小帆に分けられるのである。しかし、お祈りの時には略して十二方を守りおおる船玉大明神猿田彦の神と称えればよい。

船神前の供え物は、新造船の進水と進水後の諸行事の時には、多少の違いがあるが、そのとき祈りの祈願の供物は、船主が真心

から山の代表、田畠の代表、海の代表の珍品を供えればよい。

新造船の進水式当日の供物及び祈祷は、船大工の頭領がするので、船主は次の供物を用意すればよい。第一にサイコロの準備(柳

の枝・五歳以下の幼女の髪の毛・五穀の穀物・通宝錢十二枚・白紙、神前の供物、ローソク一対、花米一升三合、御酒(正宗八合ビン一対)、鏡餅、小餅三六五個、中餅十二個、大餅三つ重ね一對、銅貨錢三六五錢、生魚二匹、白紙若干、筆二本、墨二丁、庖丁一本、おしろい二個、口紅二個等である。船神は二人の女神で、化粧品がいるのである。

竜宮の神：海のすべてを守る神である。神名の総称は「海を守りおおる七光の竜宮の御神」と称する。神の内訳は、七光の竜宮御神、生み出しの御神、塩すつの御神、満潮の御神、潮引きの御神、口開きの御神、浜の大君の七の竜宮の御神である。供物の次第は、①生け花一対②ローソク三丁(火をつける)③お茶の香一対④御酒一対⑤花米一盛⑥洗花一対⑦昆布七枚⑧生魚二尾(腹合わせ)⑨鏡餅四組(三つ重ね)で、供え方の順序は次の通りである。注意、旧暦六月二十日は竜宮神の初二正月であるので、この日は供物を供えて、船主は航海安全を祈り、漁船船主は、航海安全と大漁を祈ることを怠ってはならない。祈願の時刻と場所については、時刻は干潮が終わり、満潮に差し掛かる水や木の刻がよい。場所は干上がった所に台を置いて供物を供え、台の足に潮が登る所にすればよい。

道のパン：この祈祷詞は、幅は二間、長さ八万八千八百八十八尋の道を守りおおる大道の神、小道の神と称えるのであるが、島

ではすべての祈祷に「ウヤン」と称えるのは誤りで、神と称えるべきである。

この祈祷は、道路を歩行中に魔物(幽霊の如き)に遭遇するとおりを達しさせて頂くようお祈りし、無事帰宅できたら、道のパンを門外の道路に出て称えて謝礼を述べてから入居することを忘れてはならないことを古人は教えていた。

ナーラサヌバン：浜辺に寄る小石(ナーラサ)を家の角に置いて、家の無事息災を祈願する時に、清めの小石への祈祷をこう称するが、この祈祷詞に「ブードウ、ピストウぬ底に溜まりたるナンザ小石、クガニ小石ば大波小波の力で打ち上げられて、ブーピー・スピーピー・アメブリサネブルシオオル、大波小波の下をくぐりおり、ブイノー・ビスイノーを通り大石に着き大波小波に人間をたばられ」と称え、後はその採取の主名と目的を称えて小石を探ってきて、家の四隅に分置し家内を清めて縁起をよくする。

苗代田を吉慶を祈願するパン：その苗代田の申の方向へ行つて、御酒や花米を供えて祈願する祈祷(苗を下した後)で、「何某の苗代田(ナースーダ)・ブネダーニに今日ぬユカル日黄金日にナンザーダニ・クガニダニバ下しおおり、このナンザダニ・クガニダニや生りケシャーラスマタボリ。インヌ毛ネー、マヤーぬ毛ネーマー・シ・ナカマーチに移しイバヤダギネー、ユスキダギネ采工スマタボリ」と祈願する。

田植えの時のパン：苗を本圃に移植するときにその主人の主田（ウヨンダーという）植え終えると、御酒花米（花米不用のときもあり、御酒の代わりに白酒（ミシイ）だけで祈願することもある）を供えるが、この供物は特別に用意するものでもなく、人夫の慰労のために持参した酒や白酒（ミシイ）を使った。この供物を田の中の方向へ持つていき、畦の上で「何某のウヤスリダーヌ、ブーマーシ・中マーシに今日のよき日に苗をさしいび終わりたりば、苗の中からイバヤダキぬように、ユスキダキぬように榮えさせたばり、ナンサブー黄金ブーン生らしめたばり。ウルジンぬなるだら、若夏ぬなるだら、イシメーリたばり、カニメーリたばられ。かりぶるぬなるたら、ペーブーイシば枕しみたばり、北枕んしめたばり」と祈るのである。

烟のパン：その家には必ず本烟（モトビテー）があり、この烟に麦か粟を播種し終わると、御酒か白酒を申の方向に持つて、豊作を祈願する習わしになつてゐた。祈詞は「何家の本烟のブーマーシ、中マーシに、今日ぬゆかる日黄金日に粟種（麦種）を播ぎしやんど、この種や生い美しや、ぱり美しやーしみたばり」で、後の祈詞は田と同じである。

漁網のパン：「ベーピサマバースムチオオタルブーケツナーケウチナーケーナツナチオオリ、イトパツクリオリ、クヌイトシリスミアンバツクリオリ、ハスミアンバツクリオリ」がパンで、後は網の目的を称えて祈祷すればよい。

釣り針のパン：「大和や唐ぬ国に生まりたる真金・バガニば力サグのシムン、シキオリイニンバクマ、ツクリオオルタル、ナン

（ウヨンダーという）植え終えると、御酒花米（花米不用のときもあり、御酒の代わりに白酒（ミシイ）だけで祈願することもある）を供えるが、この供物は特別に用意するものでもなく、人夫の慰労のために持参した酒や白酒（ミシイ）を使った。この供物を田の中の方向へ持つていき、畦の上で「何某のウヤスリダーヌ、ブーマーシ・中マーシに今日のよき日に苗をさしいび終わりたりば、苗の中からイバヤダキぬように、ユスキダキぬように榮えさせたばり、ナンサブー黄金ブーン生らしめたばり。ウルジンぬなるだら、若夏ぬなるだら、イシメーリたばり、カニメーリたばられ。かりぶるぬなるたら、ペーブーイシば枕しみたばり、北枕んしめたばり」と祈るのである。

烟のパン：その家には必ず本烟（モトビテー）があり、この烟に麦か粟を播種し終わると、御酒か白酒を申の方向に持つて、豊作を祈願する習わしになつてゐた。祈詞は「何家の本烟のブーマーシ、中マーシに、今日ぬゆかる日黄金日に粟種（麦種）を播ぎしやんど、この種や生い美しや、ぱり美しやーしみたばり」で、後の祈詞は田と同じである。

漁網のパン：「ベーピサマバースムチオオタルブーケツナーケウチナーケーナツナチオオリ、イトパツクリオリ、クヌイトシリスミアンバツクリオリ、ハスミアンバツクリオリ」がパンで、後は網の目的を称えて祈祷すればよい。

釣り針のパン：「大和や唐ぬ国に生まりたる真金・バガニば力サグのシムン、シキオリイニンバクマ、ツクリオオルタル、ナン

ガーバリ、クガニバリ」と称える。糸の方のパンは、網と同じでよく、また、鉛は、釣り針の句を応用して、「ツクリオリヤリバクリミ」と称えて、後は目的を称えればよい。

釣り竿のパン：この方は竹竿の節から数えて、根元から一番目の節をケ一節、二番目の節をザラ節と数えて、次々にその順序で数えていき、最後に目的の規格をケ一節で止めて先を切ればよい。竹藪の中に生えている竹は、東西へ向かっているのが釣りに最適であり、次は南向きでその次が南西方で、西向きや北向きはよくない。

漁具の祈祷には、御酒と花米を供えるのであるが、網や鉛の場合はお初をかけるだけに止める。釣り針のときは、鶴など集めて供物の米を撒いて食わせ、自らも花米を大口を開けて口に一杯いれで咬み、御酒も大口にがぶ飲みするのである。

呪術

魚の刺毒消し：波照間では、油雨の後で兄妹の間から最初に生まれたものがボーズ（ミノカサゴ）で、次に生まれたのが百足（ムガジ）であるので、ミノカサゴに刺された場合は、「ダンザーニンギンガラ生マリタル血バビキムルユンヌ、ニンギンヌチヤマスクトヌアンナー。ザツトケサント ニンギンヌ刀ヤヤリシリウチトラレンテンドー キュースシナビスマルドー」と称えて、小石を天へ向けて三個投げると、この痛みは直ちに消える。このパンを称えて刺傷口に息を吹きかけてから、石を投げる。魚の刺毒を受けた場合は、家の桁の内には絶対に入つてはならない。こ

の毒消しの治療は屋外で行うべきで、屋内では如何なる治療手当も無効になることを知らなければならない。

魚骨が喉にかかる予防と何かつた場合の解消法：古人は児が魚を骨付きのまま料理したものを摂らせる場合は、「アンタゲヌクチドウ」と称えさせてから食べさせていた。島では鶴の鳥のことをアンタグといい、この鳥は魚を丸呑みしても丸出しだるので、喉にかかることがある。これを称えたであろう。また、箸をお碗の上に十の型を置いて、その間から食べさせると障らず食べられる。

以上は事前の予防策であるが、魚骨が掛かつたら茶碗に水を一杯入れ、箸を十字に置いてアンタグヌフチドウと三回称えて、この水を飲むのである。この他に沖縄を経て難しい呪術もあるが、これは省略し、古来、島で伝えられたものだけを記述した。

血止めの呪術：これは「男女の作つた血であるから、引き潮のようにさあつと引け ナムアミダブトキ」と称える。この血止めの呪術は、心臓に大きな影響を与えるので、心臓の弱い人は避けるべきで、普通の人でも少出血は控えて、薬品で血止めをし、出血多量で生命に關係ある時以外はしない方がよい。

皮膚病：波照間では、アスパリ・メーバリといつて二種ある。

粟割（アスパリ）—「オオムルニヌブツテミリバ、オオバルヤ小バルヌクササギドーカリル。ビトヌバダヌアワヤスケカリル、ナムアミダブトキ（三回）」を称えて、粟を咬んでその汁を粟粒の如く広がる腫れ物に吹きかけると、直ちに枯れ失せるものである。米割（メーバリ）—この呪術も粟割と同じで、米を咬んだ汁を吹

きかける。

風負け：この病気は、悪い空氣の中へ入つたり、ウルシ（櫟）の如き毒水の下を通るとき犯されて、皮膚が赤く腫れて痛むのである。この治療及び呪術は、海岸の岩に生育している小力キを取つてきて、シャコ貝の殻で煮て食べながら、生茅を焼いてその煙で燻すと早く治る。

夜間独り歩行中に、邪神（山靈）に遭遇した場合、この靈が消えずに向かつて来るとときは、前進を控えて左膝を立てて座り、身辺に刃物か鉄製品があれば、それを加え、なければ付近の草葉でもむしって口に加えて、道のパンを称えて保護を頼むとこの邪靈は消えるのである。この時、立つて邪靈を自分の股からくぐらすと、迷わされると古人はよく注意していた。

水神のパン：サントウヌキンカラマリタル、オオイシヌナカラ、オオイシバマラオリ。アガイシヌナカカラ、アカツチバマラシオリ、フウイシヌナカカラ、フウツチバマラシオリ。シマバナシオリ、フンバツクリオリ。ナカベーチンベーカラ、ニンギンダミンビトダミン、スンタタボラレル。アマミヂヌムトバナシ、イズミヌムトバナシ、ウンガスクガーヌムトバナシオリ。以上が祈禱の要であるので、目的を付け加えて祈ればよい。

猪のパン：マリシタンの神は、白猪に乗つて部下の猪多数を引き連れて、明月の晩に浜に下りて遊ぶ。これに逢つたら、直ちに返さなければならない。これを犯して近づくと、多数の猪に包围され、危険な目に遭うと古人はよく注意した。農作物が猪の被

害を受けた場合は、この主将のマリシタンの神へ祈祷すれば、被害から免れると教えられた。

眼病にはカニーブ（野ブドウ）のパン：「ニンギンヌミンガラ、マリタルカニーブンヌ汁バトリ、ミンヌナカニイリバ、クヌミンヌヤマイヤ、サットノヘタボリ。ナミアミダブトキ」と称え、カニブの茎を短く切つたものを目にあて、茎の中の汁を目の中に吹き入れる。

波照間島に伝わる縁起について

波照間には、往古より動植物やその他の現象によつて、次に現れる事象を予知する伝説が伝えられているが、科学知識の発達した現在では、これを信用しようとする者も少なくなり、やがてはこの伝承も消え去るであろうから、将来この伝承を科学的に究明しようとする人の資料とするために記述することにする。

人体に関する事：瞼がピクピク動くとやがて雨になり、唇が動き出すと、やがて他人と口論する機会が近いので警戒せよとのことである。夢の中で陸上から舟を通る夢を見ると、近いうちに葬儀の行列を見る事になり、自分が乗つて通る夢は葬儀に参加する。生魚を大漁して食べる夢は、やがて自分が病魔に襲われる事を予知すべきであり、前歯が落ちる夢は、遠い縁者の死亡、奥歯が抜け落ちる夢は、近親者の死亡を見る事である。

大便で自分の体が大汚れを受ける夢は、やがて大金が入る兆であり、この二つの夢は、絶対に他人に話さないことで、これを

犯すとこの喜びを受け損うのである。

夜間、友人集まつて酒宴を張つているときに、天井からヨロクブ（島ではブフルという）が宴会の席の中央に下るときはこれを殺すな、これが近日中に喜び事がある前兆である。これは、沖縄でも本土でも同説である。

室内で大百足が這い回るのを見ても、これを殺すな。家族で旅行中の者がおれば航海安全の前兆であり、いよいよ時は近日中に家族の中から旅行の機会がくるが、この旅行の吉を示している。ゴキブリ（カムシ）が夜多く出て飛び回るときは、イソマグロ（トカキン）、その他の魚が大漁する。朝、茶柱が立つとその日は喜び事が続く。

朝早く男の来客を最初に迎えると、その日は縁起がよいが、女客はその逆である。従つて女は朝早く他家を訪問することは控えるべきである。早朝外出するとき、男の人と最初に出会うと縁起はよいが、女の場合はよくない。女の人と出会いそうな時は、その人を通過させてから、男の人と会うように門外へ出ればよい。受験の場合のように縁起を担ぐ時は、特に注意すべきである。

朝早く出漁に行く途中で、最初に女に会うと縁起がなくなり、女に声をかけられると特に縁起を損なうので、昔の女はこのことを心得ていて、絶対に声をかけずに、自分の持ち物の中から少量でも取り出して、相手のビクの中に差し入れたものである。特に女の尻を見ると、縁起を悪くして不漁となり、故障の前兆であることを知らねばならない。

人魚と災難：出漁して釣り糸を流しているときに、人間が糸を

たぐるよう舟に近づくのは人魚（頭や顔は人間に似て、胴体は魚に似る）である。この人魚が舟に上る前に糸を切り落とさなければならぬ。これを怠つて舟に乗せてしまうと、泣いている間はよいが、笑い出すと手がつけられなくなり、上陸させると、人魚が通つた陸地の全地域が大津波に襲われる大災害を受けるので、漁師はこのことをよく心得て油断するな、と昔の人は後輩をよく教訓していたのである。この人魚を波照間ではピトユウと言つていた。

野鳥が室内に入り、特に仏壇に止まるときは、仏靈が鳥に化けて不吉を知らせているので、厄払いの祭事を急ぎ、縁起をよくする努力を家族に促しているのである。

梟の鳴き声は、その村の近くの屋敷に不幸が起きる前兆であるとして、住民は戦々恐々で、厄払い（島ではユトバレー）として、鳴り物を打ち鳴らしてユトバレーと称えて村中を廻つて厄払いをしたのである。

モグラ（島ではザガ、沖縄ではビーチャー）が夜門外より前城（ナーフク）の東側からチンチンと鳴いて屋敷内に入れると、翌日は金が入ると喜んだものである。

墓の門石に色が付き、苔などが枯れたりして、人体のような模様が見えると、近日中に墓に関係ある人が死亡すると警戒したのである。

火玉と縁起：火玉（ビンダマ）は、頭は円形をした真っ赤な火の様で、尾は火の粉を散らした如く尾を引いて天から下り、最初は野良の高所に入り、後に部落内に入つて真っ赤な玉形をして飛

び回り、木に止まるときは、全く鳩に似た鳥形を示す。波照間ではこれを火玉と称し、これが部落内に入ると、火難をもたらすと恐れた。これを追い払うために、村中の男女が総出して、鳴り物を打ち鳴らしてユトバレーをして村中を練り歩き、厄払いをこの鳥形の火玉が見えなくなるまで続けたのである。

イタツキバラ：この行事は、旧七月十三日に墓から遺靈を迎えて三日間慰靈の誠を尽くし、十五日の晩（翌日十六日の午前三時まで）この行事を終了し、仏靈を墓へ送つて、すべての盆行事を終えるのであるが、この空間には子孫の繁栄がなく、規定通りの法事ができず、そのため成仏できないで迷い込む靈、生前に悪事を積み重ねて成仏できない惡靈が迷つていて、善靈の前に供えてあるものを盗むために、集団で集まり、これを追い払うために、五十歳以上の男達が集まつて、板を打つたり、銅鑼や太鼓を打ち鳴らして道中を練り歩いて、仏前の御酒を払い下げる行事である。この行事をイタツキバラというが、これは「板つき払い」の言葉が訛つたものと思う。この行事の意味は、部落内に集まつてゐる無縁の惡靈を鳴り物で追い払つて、部落内を浄化するために行うのである。最近まで、仏法により無縁仏へ施すためにというて縁側に供物を供えていたのである。

また、五十歳以下の青壯年は、集合して共同で井戸の掃除や道路の補修を行つて昼寝を避けさせたのであるが、これはまだ惡靈がうようよしている時に、自由に烟へ出すと昼寝して惡靈に生命を奪われるのを防止する為であつたのである。しかし、女は酒を飲まないので、男のように盆の疲れはなく、小豆の収穫期でもあ

は里の高所に入り、後に部落内に入つて眞赤な玉形をして飛るので、野良に出たが、墓へ送られた靈たちが所定の場所に集合して巻き踊りや棒踊りなど生前の盆の時の催し物を行う声や音を聞いた。その集まる場所は地域的に定まつてゐたので、旧七月十六日には、この場所への立ち入りは禁止していた。

海上より渡來し島を通つて北の海上へ抜けて通る靈についての縁起

この靈は南方の海上より島へ上陸して北上するが、道が二通りあつて、ナスバリの凹地島本家の畠より上り、その東方の高地を北進して、田原の南境を東北に進み、ペーミスクへ出て、そこから北進して本比田家の東の道より仲原家の西道路さらに北へ米盛家の東の道よりアラブチの高台を通り、西原の凹地を通つてナリ崎の凹に到る。そこで、他の道から上つてくる者を待つて北洋へ抜ける一派と、真徳利御嶽東方凹地（カタマタ）に上つて北進し、田原家の西の道、西石垣家の東の道を通つて旧ナーシヌ村の中央（学校の体育館の西より）に北進し、バサバリの道を下つて下田原先より北の海に出る一派があつた。

この道路上に何か邪魔者があるのと、これを除けて通り、もし人が寝ていると、それを乗り越えて通るので、その人はやがて死難に遭うといつて警戒を怠らずに、特に幼児には、このことを厳重に守らせたのである。この道路中に家屋を建てるとき焼き払われるとして、絶対に避けていたのである。昔の靈人が聞くと、カタマタからの上の靈は、「ナースシムラ シットイ シットイ」と呼んで北上して行つたとの伝説がある。

シマフサラ：波照間では、春秋二回、風邪の流行しやすい次期に、牛や山羊を屠殺し、その血を注連縄（しめ縄）にかけ、その動物の毛皮を縄に結んで村の出口から海へ通する所、二力所、その他の要所へこのしめ縄を張つて魔除けの祭事をした。この後で、五十歳以上の老人は、この屠肉を共同で炊事して昼食を共にして解散したものであるが、この行事は支那から伝わつたものであろう。昔、支那では悪疫が流行すると、その疫病神を避けるため、同様な行事を行つたようであり、その風習が当地まで伝授されたものと思われる。島の疫病神は海岸の道路から上がるのと、海岸の出入口の要所にしめ縄を張つた理由が判るのである。島で春秋の風邪が流行りやすい時に、これを実行したのは、体力が弱り掛けている老人達の栄養補給に役立てようという保健衛生を加味した良策といえる。

ある家屋から、青い光する火の玉が、まつすぐ上空へ飛び上るのを見ると、やがてその家からだれかの靈が昇天する前兆である。また、ある屋敷内に弔旗の如き白旗が遠望されると、近日中にその屋敷で葬儀が行われる前兆である。

夜間、沖合に出漁している場合に、ある墓地に焚き火が見えると、近日中にその墓に死人が葬られる前兆で、このことは大正の終わり頃までは、出棺は満潮のよい時刻を選んで行われたもので、その時刻が夜間に当たると、松明を付けて出棺したので、その火が前もつて現れたのである。

ある墓に人が多数集まつたような音が聞こえたり、石垣を崩すような音がすると、この墓に死人が葬られる前兆である。村と村

を結ぶ大道の上に、血痕が人間の一歩毎に落ち続く場合、血痕の先に散る方向の村に、近いうちに悪疫が流行する。

ある屋敷に四隅が門から血痕が内に向かつて現れるとこの家中に不幸があり、反対に外に向かつて現れると死人の出る前兆であるので、何れの場合でも厄払いの清めを急がなければならない。

旧正月二十日以内に、その村から死人が出ると、年中この村から白位牌の切れることがない程死人が出ること。また年初に墓に死人を葬った方向の墓にその年の死人が多く葬られることを知り、厄払いをして縁起をよくすべきであるとい伝えられている。

竹の花の縁起について：竹はなかなか花の咲かないものであるが、この開花を見ると、気象上の大異変があることを予想すべきである。また、地下から名の知らないアリが無数這い出して、骸が盛り上がるのを見たら、大戦争か大異変に遭つて世替わりを見ると、古人は教えた。

宇宙にホーキ星が現れると、事変が起つてこれに巻き込まれ、苦労するから警戒して油断するなど教えた。

オオシャ（番所）の南方で牛の大声が出ると、やがてウヤデル（ウヤダリ？公事）の起きる前兆であり、名石村の棺龕の安置所（ガシヌヒイ）の前方で、牛の大声が出たら、やがて島内で死人の出る前兆である。

蛇の交尾はなかなか見当たらないのであるが、万一これを見つけると縁起が悪く、間違つて殺したりすると、身内の者が死亡する厄を受けるので、これを見たら木の枝を折つてその上を覆つて、「君たちの恥を隠してやるから、ゆつくり用を足すように」と言

つてやると、厄を逃れるとの伝えがある。

海上での縁起について

バイバティローマ伝説で、布織機が海上で縁起の悪いことを示したが、与那国島から西表島に来る物盗りをなくすために、その間の海に布織機を持って行つて浮かべたら、海が荒れて物盗りが来なくなつたとの言い伝えもある。また、鍋を海上に浮かべると直ちに風波が荒れて暴風雨が襲来するとして、昔の人はこれを強く慎み、大正末期まで波照間では、布織機を組み立てたまま船積みすることを避けて、わざわざ分解して積み荷し、鍋を海上に浮かべて洗うことを厳禁していた。

人間の生血を海水で洗うと海が荒れ出すとして、波照間では嚴禁されていた。このことについては、ビタブーパーと川平ブーパーの親子の物語に出るのである。ビタブーパーが、この波の荒れのを鎮めるために祈願した跡が現在も残つてゐる。

ニンニク（ビル）を海上に持ち出すと海が荒れるといつて、波照間では節祭後、翌年の豊年祭が済むまでは絶対に船上に乗せないようになっていたが、明治の終わり頃から近代文明が漸次入つてくる中で薄らいでいつた。

また、海上で大声を出して歌うと風に吹き荒れるといつて、昔人は船上で高声を出さなかつた。これは、大正の終わり頃自然に消滅したが、これらの思想の理由を科学的に解明してみるのも面白いと思う。

農作物の豊凶を占う水

内盛御嶽の門口に向かって、右側の石垣の上に、水を入れた瓶が置いてあるが、この中にある水の量が、中腹にある年は豊年であるが、半分以下に下ると凶年になり、極めて少ない年は、長期干ばつに見舞われて飢饉年になり、また満ち溢れると世替わりになつて島民の生活に大きく影響すると言い伝えがある。

この拝所は、決まつた日に真徳利御嶽の司や氏子の女達が参拝するのであるが、島民は、この神水の在り方に注目を続けている。私は母から、琉球王府の統治から日本に施政権が移る前年に、この水が溢れ出たのを真徳利御嶽の司の米盛のバーが語つていたと聞かされた。

また、昭和十五年頃、この水が溢れ出でて、中にヤシガニが死んで腐っているのを見て、参拝者が驚いて瓶の中を洗い清め清水を入れ替えたと語つていたが、日米戦争の結果、日本は負けて米国の統治下に入る世替わりを見て、神靈の正しさに敬服しているのである。

墓地を南方より北方へ移した伝説

波照間の住民の墓が南にあるために、つねに力の強い豪傑が生まれて、大和からの者を追い返している。この豪傑の誕生を絶やすために、この墓地を島の北方へ移転した方がよいと考えて、薩

摩が強制命令を出して北方へ移させるため、以後このような豪傑が生まれなくなつたとの伝説がある。この伝説を考察するに、力の強い豪者がいて外来者を追い返したことであるが、私は防備の形式等を見て、和寇が時々、侵入することがあるのを力で感嘆したであろうと思つてゐる。

墓が部落の南に造られた後が遺つているのは、ビタブーバーの親子を葬つてある墓が居所の南にあり、シコーダのバー墓が居所の跡の南にある。その外にも主の分からぬ墓が南に遺つており、前部落の南の凹地北側斜面にいくつかの主の分からぬ墓が數力所在するのを見ると、昔は南の方に墓を造つていたことが窺われる。

また、薩摩の検視役人の目を欺くために、前部落南にある墓には笠石を覆つてある墓が多く見られるが、北方では山田ブーバーの墓と天人の墓の二力所しか見当たらぬので、この伝説の出た時代と仏法の伝来を憶測すれば良いとも考えられる。

なお、強力の傑人の誕生を拒んだ一説に、ゲートウホーラの物語がある。このホーラの遺言に、「自分が死んだら部落の東に墓の門を太陽に向けて造つたら、強力の傑人は生まれないが、島民は貧乏する。また、この墓を、部落の北側に門を西向きか北向きにすると強力な傑人が生まれ島の平和は乱れるが、住民は裕福になるので、住民の意思を尊重して造るよう」とのことであつたところで、以来強力の人は生まれないとのことである。

外来者を威嚇するために造られた遺跡

武力に勝れた和寇の侵入を防ぐために採った方法に、ビタ家（本比田家）の東から南方海岸に通する道の中に、人の足形に彫られた石が置いてあるが、これは、この部落には硬い石を踏んで足跡を残す程の強力者がいて、入れば殺されるぞと外部からの侵入者に予告する彫刻の石を置いたとの伝説がある。この足跡をマンギヤヌビヨンと称するが、マンギヤは万力で、ビヨンは足跡の意味である。この外に、北部落の東北、島の縦断道路に中にもこのような石が置いてあるのを見ると、外来の東方からの侵入者を嚇かすためであろう。

これに欺かれるような無知な者はいなかつたと思われるが、この遺跡を見ると、当時の島民がいかに外来の侵入者を恐れていたかが察せられる。この恐怖心は、波照間ばかりでなく、群島住民が等しく持つていたことが察せられる。一例を示すと、与那国では台湾から侵入せんとする者（高砂族）を嚇かすために大草履を作つて定期的に流したとの伝説があり、同じ目的のために計画されたものである。

また、島内の各戸から御飯のお初を供出させ、各村より一人の代表が出て、願人という祈祷の名人を頼み、島の東方より中央の道路を西へ通りながら、要所に立ち止まって害虫除けの祈祷を行つた。そして、芭蕉を切つて舟（筏）を作り、マーニの葉で帆を作り、捕まえた害虫類をその舟に乗せ、各戸から集めた御飯の初を乗せて渚に置き、この舟の周りを九回廻つて祈祷して、この舟を海に浮けて流すのである。

この時、祈詞は、「この島がヌグ島で飢餓島で食い物がないが、西方に高砂島があつて豊かがあるので、その島へ移つて楽に生活できるように、私共島の代表が協力してこの舟を作つて見送るのであるから、安心して行け」と祈つて舟を浮かべて流すのである。この舟が戻つて島に着いたら、ソージが利かないと忌み嫌い、沖へ向かつては走つたらソージが利いたと安心して止まり場に引

波照間島の諸行事の概要

「もの忌み」：波照間では、イナースピーといつて二種の行事がある。一つを「ビタトムン」といい、もう一つを「プラアスピー」という。

き揚げたので、この人達が浜から陸へ向かうのがイナマ先から見えるので、その時にそれまで寝かされていた住民は、首を上げ各自の泊に引き揚げて、携帯してきた料理を温めて、お互に分合つて食事を楽しんだのである。

その後、田舎佐の職にある人が、各々の担当の村の牛を調べて、繩の悪いものや痩せ牛の持ち主を呼びだし、改めるよう厳重に説得したのである。当時は、農耕に精を出して年貢を完納させていた庄政の時代であり、繩の弱いのは切れて農作物を食い荒らすことの防止であり、痩せ牛は農耕の能率の悪いのを戒めたのである。

この物忌み（イナアスピー）を、迷信であると簡単に批判する傾向にあるが、私は当時の庄政の中にあって、生きる楽しみを求める方便の策で、農民が知恵を絞り出して編み出した行事であつたと敬服している。即ち、現在流行のレクリエーションのようなもので、日常の疲労回復に役立つた慰安日であつたといえるのである。

舟を造つて害虫を乗せて送り出した後で、この代表は海に潜つて魚を取り、それを焼いて昼食を済ませて引き揚げる。この人達の引き揚げを待つていた住民は、その人達が見えたと、男達は自分の牛を伴い、女達は道具類を持って帰宅し、その日の行事を終えるのであるが、虫除けの行事に関わった人々は、昼食に残つた魚やタコをウシウズミバマ（牛を埋葬した浜）の東側にある岩の上で始末し、持ち物を下の浜で洗つて解散したのである。

「プラアスピ」：これは当日農耕を休んで、各戸から御飯のお

初を部落の代表（女二人）が持つて、ムドナリの浜（下田原の仲本家の畠の西側下の浜）に下りて魔除けの祈祷をする行事である。この行事も、庄政下の労働から免れて休養の策に出た究極の方便であつたであろう。何故なら、当時の役人は、農民を働かせると牛馬の如く酷使し、寸刻の休養する時間も与えなかつたので、こうでもしないと人間として生きられなかつたのである。

「シマフサラ」：これは厄よけの行事で、春秋の風邪の流行しやすい時期に行われる。意義があつたといえるのである。この行事がいつ頃伝わったのかは不明であるが、太古支那で魔除けの呪術として、注連縄に動物の生き血を塗つて、年や村の要所に張つたとの記録があるので、この風習は支那より琉球へ伝わつたのが、離島の隅まで広まつたものであろう。

波照間では、島全体で一致して牛か山羊を買って屠殺して、五部落へ肉や骨、血や毛を配付し、各部落では五十歳以上の男が指定の場所に集合して注連縄をない、その縄に生き血をかけ、毛や皮の小切れを注連縄に結んで、年下の三・四名の者が部落の出入り口や港湾の入り口の道路の上に張り付けた。

残つた老人達は、肉や骨を大鍋に切り込んで焼き、幼い孫達も伴つて共にこの料理を食べ昼食を済ませて解散したのであるが、私はこの行事は風邪の流行しやすい時期に、老人達に栄養を与えて静養させようとした者と考え、これを創始した立案者に敬服するものである。

釜廻りの祈祷

この行事は、島では十日釜廻りといつて、旧暦十月になつて天候がよい乾燥期に行う火災予防のために行事である。この時期の壬・癸の吉日に、已年生まれの方が祈祷の主役となり、お伴の者は道に出ると大杖をついて、祈祷者の近づくのを知らせるのである。この杖の音を聞いた家の家族は、灯を消して祈祷者の入居を待つのであるが、釜の前にむしろ敷いてこの人達が座れるよう用意して置くのである。当日は釜の周囲をよく掃除し、燃えやすいものや煤は掃き除き、火の神には生け花を供えて、鎌の後には瓶に水を入れて、それに火消しに役立つ水を吸いやすいホーキを添えて置いたのである。ヤシは火消しの神であるとの神話によつて、ヤシの実でできた容器を置く習慣があつた。

一方、村中の十五歳以上五十歳までの男は、前もつて供出した栗で造作られた酒と、三十歳以下の若者より供出された乾魚、力マボコ、タコなどで料理を作つて酒の肴にして、飲みながら防火に対する注意、例えば部落内の消火や野火事等の消火、明治終わり頃まで各部落や近隣にあつた防火用の溜池からの送水等について話し合つたのである。そして、祈祷に廻つた方の帰りを待ち、その報告を聞いて謝礼を述べて解散するまで徹夜して挙行された實に有意義な行事で、大正の中頃まで続いていたのである。

この祈祷者は、「オースサレー」と大声で称え、途中道に牛の縄でも張られていたら、伴の者が庖丁を持っていて、この縄を切つて通り、縄を越えることを忌み嫌つたので、当夜は道に牛をつなぐ事を慎んだのである。

吹子祭

波照間では、この祭典を「カチエーブナガ」という。この行事は、島鍛冶という制度があつて、東組（北、南両村）と西組（前・名石・富嘉三村）で各一名を選定して農具の修理、新調を司る役目に当たり、六十一歳後、後任に引き継ぐまで在任したのである。この鍛冶を作る道具のために植物が殺れる（伐られる）ので、この木の精が、鍛冶屋の命を奪いに来る所以で、それを迎えて諸供物を提供するとこれを受け取つて退去するという言い伝えに基づいて、この行事が厳格に行われたとの伝説である。

供物は、鶏の羽毛を全部取り、羽の先に二本羽毛を残し、尾の方も同様に残し、嘴にはカジュマルの葉の如きものを加えさせ、立てさせて供えた。また、鏡餅、花米・洗花・クパン（魚の乾燥したもの）等を供えるのであるが、鉄は熱すると赤くなるので、餅その他の供物は赤く染めた。以上の他に御酒、御神酒、吸い物、肴等を加え、部落代表九名（クナという）と鍛冶の責任者が夜更けまで祈願する。

部落では、代表者が各戸の札人（十五歳～四十九歳）から戸数割や人頭割で割り当てた酒や魚・タコ等の乾燥物を料理して、この酒肴を吹子のある鍛冶屋に提供し、その残りを分けて食べながら鍛冶屋から祈願人の帰りを待つのである。また、若い女達は雑炊を作つて鍛冶屋に届けたのである。

この祭りは、旧暦十一月七日と決まつていて、当日の夜半に月が没した後で、この行事は終わるのである。その翌日は、各戸各自に割り当てた栗で鍛冶の責任者が作つてある酒と肴を準備し、部

落代表や親戚多数を招いて盛大なお祝いをするので、出費が多くこの責任者を選定するのに苦労したのである。

この行事は、大正末期まで続いたが、昭和になつて島鍛冶の必要がなくなるとともに自然と消滅したのである。この行事を風神への祭典であるとの口碑もある。

節祭（シイシン）

波照間では、戊戌の日から始まって、辛丑の日の四日間に行われる行事であるが、俗にシイシンソージといつて、この四日間は心身を清めて、来年度の豊作を祈るとの意から、食事に色々つけると農作物に鋪がつくといって、すべての食事に味噌や醤油を入れず、昔塩の少なかつた時代は海水で調味して食膳に出していたのである。

その前に青少年は、木の上に棚を作つて部落内の凶事を見たのであるが、その間、音を立てることが出来ないので、米や粟などの食糧が不足して是非とも白を使わなければ鳴らないときは、海岸まで白を運んで揚ぐというように厳格に謹慎しなければならなかつたのである。

斯様に、心身共に清めると、地上一寸以上離れるとあらゆる靈感が伝わって、その後に起ることが聞こえたり見えたりすると言われた。そこで、若い男女が風下の村のはずれの石垣の上に集まつて、部落の凶報や吉報を聞いたり見たりしたのである。

その時に部落内に米白の音が多く聞こえると、翌年は米は不作で、粟の方が豊作し粟白の音が活発に聞こえると翌年は米は不作で、粟の方が豊作である。

になるといわれ、白の音が活発に聞こえない場合は、翌年は飢饉になる前兆であるとのことである。

部落内に鳴き声が聞こえると、その付近から死人が出るし、念仏鉦の音が出ると、その行く先には死人が葬られるので、その方向に墓のある家から死人が出ることを予想したのである。

また、火玉が見える付近に火事が出るといつて、最も恐れて警戒する必要があるので、自分の部落は勿論、他の部落へも注意したが、これを見るのは木の上の棚にいる若者達の役目であった。

室内は二日目にきれいに掃き掃除をして清め、食器や家具その他の持ち物の塵埃を払つて翌年の豊作に備え、三日目に豊年の祈願を捧げ、四日目には舟の競争をしてこの行事を終了するのである。

この舟の競争をシイシンフニと称し、富嘉・前・東が三カ所の拝所に従つて出るのであるが、旗手は登根本である富嘉は保多盛、前は親盛、東は東迎の三家の主人が当たり、サバニ（島ではイタフニ）の舟首と舟尾はカズラで巻き、舟頭以下漕ぎ手の頭にもカズラをかぶるので、この競漕は競争というよりも豊年祈願を目的として慎重に執り行われた。初めは自分の村の神前、富嘉は美底、前はカナバリ、東は大泊の浜で行われ、その後、中央のイナマイバシケーの港で行われるのである。

御嶽バーレは各所で九回漕ぐのであるが、中央に出る前に六回漕いで、帰つてから三回漕いだらよいのである。その時、中央から溜めて帰つたアカ（舟内に溜まつた海水）を汲み入れる習わしがあるが、これは中央から福を持参して自分の拝所に注ぐとの意である。前と東は二カ所の拝所の分で、十八回も漕ぐのである。

この競争中、往くときはジラバを唱えるのであるが、これは豊年祭の翌年から野良でユンタ・ジラバを盛んに歌い、競争して聖地に励んだのを、この節祭の後は、歌やその他の音が出るのを止めて謹慎して、専ら豊作を祈るためにこの節祭の最終日に、陸の音楽等すべて音の出るもの海へ持つて棄てるという意味であるとの言い伝えである。

なお、舟や漕ぎ手が力ズラをかぶるのは、大昔神が天下りする途中、悪者に五穀の種を奪われるために、身辺を力ズラで覆い、その力ズラの下に種子を隠して下野されたとの古話があり、離島は舟で運んだので舟に力ズラを巻いたとのことである。

この儀式が現代まで続いているのが西表の祖納で、祖納の前泊の拝所が似ている点や言語の単位が全く同じであることから推して、祖納は波照間から移住したことを立証している。

種取り祭

種取り祭は、節祭が済んでから戊午の吉日をトして行うのであるが、他島の盛大な催しに対して、波照間ではごく簡単である。波照間では年二回行われ、初回は粟種取りで、二回目は稻の種取りであるが、その儀式が違っている。

初回の粟種取りには、男子で食事を覚える年頃より数えて男の数だけ御飯を盛るのであるが、その御飯は粟を元にして餅米を混じて炊いた物を山盛りにして神前に供え、ガイジ（種子等の物入れ）に粟の種子を入れたものとビル（二ンニク）と籠とをお膳に乗せて、男の世帯主が豊作を祈願した。そして、このお膳に供

えたものを庭先に運び、東方へ向かって祈祷を捧げ、籠で土を起

こして、そこに粟の種子を蒔き、ニンニクを埋めて座敷に上る。そこで、先に供えてあつた御飯（ブーアーという）に庖丁（竹へら）を入れ、その切った御飯とニンニクを塩味だけで調理した汁を摂つてこの儀式は終わるのである。この汁物には肴や貝があればこれを入れるが、なければニンニクだけで炊くのである。ブーアーの切り方は、各自の分を各自で竹べらをいれて切るのである。

この山盛りした御飯を波照間ではブーアーというのである。女の方は、別に普通の握り飯大の御飯を作つて、容器に若干いれて室内に置くのである。

なお、先に述べた汁物には絶対に陸の動物の肉をいれてはならず、これは厳重に禁止されていた。

稲の種取り祭は、稲の苗を苗代田に播いた日に、米の握り飯を作つて神前に（座神）に供えて、発芽が良くなる様にお祈りして、神前で食べる所以であるが、粟の種取り祭のようには厳格な規定はない。

以上の如く、波照間島における種取り祭の行事を概述したのであるが、波照間に五穀が伝わったのは、稲より粟が先であつたことが窺われ、また波照間の水稻作は、天水に頼るので不作の年もあるので、稲の種取り祭は簡単に執り行われたことが肯かれるのである。

先の粟の種取り祭の時に作ったブーアーは、家族の者だけでは食べ尽くすことが出来ず残すことが多いので、隣近所や知人を招いて処分することがよくあつたのである。

初穂祭

波照間ではこの祭りをスクマンマッスリーという。拝所の登根本で執り行う行事であるが、各々登根本家によつて指定の祭烟（マツスピテー）があつて、そこに初種子を播いて、そこから収穫する栗やピル（ニンニク）の初穂で出来た物を神へ供える行事である。

保多盛家の祭烟は同家の南西方近くで、石で囲われている煙があり、本比田家の野祭烟は、真徳利御嶽の北西方に御嶽に隣接する同家の煙で、石に囲われている。親盛家の方は、振石盛御嶽の北方近接の同家の煙に石垣で囲われ、東迎家の方は、白郎原御嶽に近接の所に指定されてあるので、そこで穫れた初穂を報告する所もあれば、穫れた栗で握り飯を作つて祭典を行う所もある。

最も重要で厳格な行事は東迎家で行う行事で、主催者は同家の世帯主が当たるが、祭烟で穫れた栗で握り飯を作つて神前に供えて行うのであるが、この日が庚寅に日で、この日から数えて六十一日目の庚寅の日が字全体で行う豊年祭である。

東迎家では、この行事が行われるまでは五穀の収穫をしてはならない定めになつてゐるが、早熟の物があつて刈り取らねばならない止むを得ざる場合は、刈り取つた物の上に傘か他の物で覆つてくる習慣であった。この祭りを島ではブーリンタマと称した。

山どみ（ヤマドミ）

波照間では、山どみといつてやかましい禁制があつて厳格に守られ、大東亜戦争前まで続いていた。これは今流の週間制度の如

きのもので、一定の期間を決めて山入りを禁止すると共に、生木の伐採することも厳重に慎ませていた。

また、この期間、ビラチノウガリの上を動物の肉を越すと、海神が怒つて台風が襲来して山林が荒れるとのこと、厳重に禁止されていた。その理由は、このウガリの下まで高那割（バリ）が走っているので、動物の血を海の繞きである割れ（バリ）を越すと海神が怒り、海が荒れるとのことである。

この週間の始まる前に、字の係員によつて大きな茅束がこのウガリの上方と下方に縛つておいて、厳重に警戒していたのである。私はこの制度は、蔡温の林政から採られたものと思つてゐる。

なお、昔の人は一本の木を伐つたら二本を植える蔡温の林政を尊重し、一本の木を伐ると必ず二本の生木の枝を差して、二本植える暇がないので、代わりに二本差し木するので、山の神はこれを保護して生長させて頂きますようにと祈つたこともこの制度からきたであろうと思う。

泊まる願（トマルニゲー）

このトマルニゲーは、神酒（ミキ）を作つて、司が中心となり、氏子や女や山人數（男）が所定の場所に持参して、海鎮の祭典を行うのであるが、このミキを置く場所が部落によつて決まつてゐる。富嘉村はフルマルヤマ、長石村はカナバリヤマ、前村はペムチバマ、南村はユーピー浜、北村は大泊浜に下る磯の道傍であつた。

この方面の海は、各部落の登根本の管理区域で、これをパ力と

いつていた。このバカを説明すると、フルマル崎より浜崎までは保多盛イン（インは海のこと）で、浜崎よりイシヨウチの前まではナンチン（島本）イン、イシヨウチより以東、真徳利御嶽の下方まではビタ（本比田）イン、これより以東クラネー先まではウヤマシ（親盛）イン、フルマル崎より以東、下田原に西の崎までは桃盛イン、そこからニシムドルの西側まではアガタ（東田）イン、ニシムドルの東側よりアリドウヤマの下まではムゲー（東迎）インで、それぞれの家の所管で、豊年祭の漁業（イシヨーブサ）は各部落の管轄の海辺に神酒を持って行つて祈祷して出漁し、この海から獲れた魚を神前に供えたのである。また、各所にイシヨウドマルがあつて、そこに集まつて出漁したのであるが、富嘉村は範囲が広いので、保多盛の前の高台にイシヨウドマルをして、そこから出漁していた。

洞穴内での布織り時代

白郎原御嶽の中にスーインという洞穴があり、昔母親がそこで布を織つている間、子供達が石を擱いて遊んだとの伝説がある。石を擱いた跡がかなり窪んでいることから、長い年月の間、この洞穴内に出入りして布を織つたことが察せられる。

苧麻の纖維は乾燥すると切れやすいので、湿気のある洞穴で機織りをしたことが窺われるのですが、この苧麻を入れたのがベービサマバーであるが、その人の住んだ屋敷跡を見ると、その方面に人家が散在した跡があり、この洞穴を利用したのはその人達

であると考えられる。なお、年代は詳らかではないが、白郎原御嶽の創始以前（十六世紀以前）ことの間違いなく、相当古いことが窺われる。

赤蜂の蜂起は、カンダ遊びが禁止されたことに刺激されており、このカンダ遊びに着用したという男女の服装が現在まで野底家に保存されているが、この服装は麻で出来ており、色も黒と青であるので、その当時すでに藍も來ていたことが窺われる。また、「マヌムレーイシケーマユンタ」の歌詞からも、苧麻の纖維を紡いだり織つたりする為に洞穴をよく利用したことが察せられる。

マヌムレーイシケーマ歌とその時代

この歌の作者も年代も不明であるが、波照間が琉球王府の施政下に入つて後のことであることは歌詞から推して明白であり、言葉が石垣の言葉が入り混ざつていることからして、石垣出身の役人の作であろうと推察している。

この歌には、当時の島の生活状況が具に歌い込まれている。例えば、食事については、麦のこと、甘藷のことだけを歌い、中食に塩・味噌・ニンニクの和え物を述べていることから、米や粟は年貢の対象として一般家庭の常食から除かれていたことが推察され、食事が質素であることから、年貢のために血みどろの苦難を強いられていたことが想像される。

納布のために女達が夜業（夜なべ）に徹夜の苦労をしたことが、この歌の中に、「モーヌインヌベーヤゴー、バショーチヌイン

ヌニシャゴー、ウリバシ ヨーベーシ」とあることから推察できるのである。このヨーベー（夜業）は、民家が狭く、広い洞穴を利用するほかない苦肉の策であったと思う。長年同所で夜業が継続されていたことを示しているのは、モーインの壁の岩が焚き火の煤で黒くなっていることである。バショウチのインは、現在砂で埋まつて、その跡は見えないのであるが、可成り広い洞穴であることが音響で想像することができる。

なお、この歌詞に詠まれている言葉で、当時の言葉遣いも知ることが出来るが、現在東方面と西方面の言葉で多少ずれているのがあり、この歌の歌詞から推して、東方面が古語のまま継続されており、西方面が多少変化した感がする。

甘藷にまつわる伝説

甘藷の伝来については、記録で示されており、沖縄の八重山では伝来した年代も、持つてきた人も違うようであるが、年代は沖縄が先ということになっているが、私は八重山は沖縄よりも先に来たと信じている。その甘藷の名称が沖縄と八重山では違っている。名称は石垣ではアッコン、白保ではアンガン、波照間ではアガソであるが、波照間の名称は訛っていて、白保の名称が正しいとの伝承がある。沖縄ではウム（イモが訛つた）であり、八重山のアの頭文字は安南方面の地名を付けたと考えられる。

八重山に甘藷を伝えた方は、波照間出身の子孫であつたので、波照間島はこの人の縁故によって、他の所より早く普及されたであ

る。

力ナアガソの普及によつて、島民が芋を常食するようになり、米や粟を年貢のために貯蔵するようになったとの口碑があるが、これは力ナという人が自家の墓の庭に不思議な蔓が生えているのに気づいて、これを自分の畑に移植して育てたところ、蔓の生え方が旺盛で、根からも節からも芋が出来、この芋が美味であるのと、この芋を島中に広めたので、この芋を力ナアガソと称するようになつたといふ。

この芋は、害にも台風にも強く、丈夫で多収穫ができるので、住民に喜ばれていたが、この芋の出現以来、芋を常食にして米や粟は貯えて年貢に備えるように嚴命を受けて、島民は米食を断たれるようになつたとの伝説があり、古老はよくこのことを話していた。

この芋は長年にわたり、備荒用に大事にされて、改良種が普及される最近まで栽培されて住民に珍重された。芋の色は赤色をしていて、小型で蔓は細く長く伸びる特徴があつた。

移民について

波照間島は健康条件に恵まれていたために昔から人口が多く、人口対策の伝説が多く、従つて移民の歴史も多いので、その概要を述べてみたい。

西表の祖納との関係については二説あつて、波照間では祖納から波照間へ移住したとの口碑があり、祖納では波照間から移住したとの伝説であるが、私は後者の方が正しいと思っている。何故

なら、移住した者の故郷が恋しくなり、この恋々たる気持ちが抑えられずに、生まれ島を見るために山頂を転々と渡り歩く内に、波照間島を見渡せる展望の利く山頂に達したので、この山頂を波照間盛と名付けたと祖納では言い伝えている。また、考えられることは、西表は土地が広いので島内で他に適地を求めて移住が可能であり、海を渡つて波照間へ移住する困難さから考へてもこの説は等を得てないと思う。他方、波照間は小島であるために数多くの人口を収容する地積がないために、広い土地を求めて移住する必要があることから、祖納に伝わる説が正しい感がする。西表の祖納は、言葉（単語）をはじめ、風習、行事、その他類似したこところが多く、波照間とつながりのあることは明白である。

南風見は糸芭蕉と下志村との関連として、下志村の住民が移住したことは否めないが、移住についての記録がなく、詳らかではない。

最初に移つて住みついたのは、西方に拝所や屋敷の跡が遺つてゐることから、西方面であり、そこから土地の広い東部へ農耕地へ通う不便さから、現在の廃村跡の地へ移り住んでから人口減退へ向かつた。その原因は、村の北西から村内に流れ出る水源によるものと言ひ伝えがあるが、私はこの水による蚊の発生のよつて、マラリヤが蔓延した事によるものと推察している。

西の方に残つてゐる拝所や屋敷の跡、その他の遺跡や古い墳墓の跡を見ると、移住の年代はかなり古いようである。東の方へ移つてからは、猪垣、その他の遺跡から見て、苦労して部落の維持に努めたことがよく示されている。

明治三十八年、私が九歳の時初めて旅立ちをしたが、風向が悪

くこの村に寄港して村の北東の金盛家に母と宿泊したときまでは三十軒余も戸数があつて、金盛家の家屋は大きく、柱の太いのと礎石の大きいのに疑問を持ち、母に尋ねたところ、「この南風見は台風の強い所であるので、台風に強く長持ちする福木の古木を用い、礎は丈夫なフー石（古生層の石）の大きいのを使う」との説明に感心して聞いた記憶がまだ脳裏に残つてゐる。

なお、金盛家の裏に生えていた大福木は、竹富町長時代に該地の調査を行つたときまで残つていてのを見て感無量だつた。

この南風見の村は、大正の中頃に悪性インフルエンザに襲われて人口が急減し、自由の時代であるので残つた者が大方の竹富島の坡座間村の南西方に移住し、また各自縁故者を頼つて四散し、大正の後期にとうとう南風見村の歴史が終止して廃村となつたのである。

私は幼少の頃より父がくり舟の船頭をしていたため、各島々に知人が多く、南風見の住人が父を頼つてくるので、この人達から南風見の話をよく聞かされた。

鹿川村は、記録に波照間から網取村鹿川に移住したと簡単に示されただけで、戸数や人口数は示されていないが、この村の伝説にはこの村は非常に栄えて、札人が三百人も居たとのことである。鹿川台地の奥深く、北方台地より東ネース浜上部まで開発して米を作つた跡が残つておらず、芭蕉が植えられ今まで残つてゐることを見ると、榮えていたことを示している。

なお、要所に作られている猪垣の遺跡でこの村の耕地面積が推定できる。この村の最後の状況については、六反帆船の造船の頃

で述べた通りで、大正の初期までまだ八軒残っていたが、最後は一人の老人が残つて頑張つていたが、大正の終わり頃、この老人が網取に移つて廃村になつてしまつたのである。

崎山村は波照間から強制移民で移されたことは記録に示されており、蔡温の移民政策の一つであったように思う。移民の人口や戸数については、記録がまちまちで信じがたいのである。それは、

崎山節の歌詞で石垣方面では男ムム（百人）、女ヤス（八十人）と歌うのであるが、いかに頭の悪い役人でも人を移住させるのに男數より女の数を少なく組むはずがないからである。

崎山節の作者については、石垣市の崎山家では、祖先で崎山の役人であつた方が作詞作曲したと伝えているが、波照間では垣本

ナビという老婆が首里王府より派遣された検視役人の前で、即興で歌い出したもので、その歌のあまりの哀れさにこの老婆だけ帰島を許されたという口碑がある。この人の晴れ着が記念として遺されていて、大正末期まで残つていた。また、この人が崎山から持ち帰つた白が近代まで残つていたとのことである。

この伝説は崎山でも最近まで伝えられ、崎山元村（西村）にこの人が掘つた井戸が記念として遺されている。崎山節で垣本ナビさんの作詞の中に、「ビドナヨイサ ミドムヨイサ クママリ」とあり、このなかのヨイサは、波照間の方言では未婚者を指し、クママリは縁組みであるので、未婚の者を強制的に縁組みしたことを示しているのである。この歌の歌詞は全部波照間の言葉で表示しているので、私は垣本ナビさんの作詞が正しいと思う。

移住年代は定かではないが、崎山村での伝承によると、移住後

の繁栄は良くて西村では屋敷が足らなくなつて、谷一つ越して東村に別れ、東村に七十五戸、西村に七十五戸、合計百五十戸に栄えた。そのため崎山湾の南台地の奥深く山奥まで開発し、また同湾の北台地全地域にまで開発された跡が遺つてゐる。波照間人の勤勉さで、この広大な平地や斜面を開発しており、裕福であつたことが窺われる。

ところが悪性マラリヤに打ち勝つことが出来ずに、マラリヤの伝播以来人口が減り出して、東村がつぶれ西村だけ残つて存続していた。この村の人々は波照間母島住民の性格を受け継ぎ、勤勉と貯蓄のため裕福で、納税は波照間と並んで完納の成績一位を続けていた。

大東亜戦争により若者の徴用によつて人口は急減し、戦後は六戸で辛うじて村の維持に努力していたが、私が竹富町長就任当時まで六戸は持ち続けていた。マジン（稲を積み上げた物、波照間ではシラという）は、他では食べ尽くされて皆無であったのに、この村では今期稻の収穫まで残つてゐるのを視察して感激したのである。この村も外に出た若人が帰らなくなり、老人も減り始めて近年（昭和三十年以降）になつてついに廃村になつたのは断腸の思いである。

先に猪垣の在り方で該地の耕地の規模が推定できること述べたが、その垣の構造は猪垣と牛垣では石積みはほぼ同じであるが、側の穴掘りが内側か、外側かで判明しており、それは牛と猪の跳躍の性格を応用して造つてあるのである。

伝説によると、波照間の保多盛家と崎山の保多盛家と白保の保

多盛家の三家は、同じ日に火災に遭つたが、この現象は琉球王府の時代が尽きて世替わりすることを示したものとの伝えがある。火災で焼けた波照間の保多盛の本家を再建するために、崎山から送られたという福木の柱が最近まで立ち、茅葺きに改築するまであつたのを見ると、崎山村の住人達の古里に対する関心の深かつたことが分かる。また、屋号も波照間の屋号と似ていたのである。

明和の津波後の移民

明和の津波による石垣島の廃村復興のために、離島の津波の被害がなく人口の多い所から、廃村跡に移民するよう王府の指令を受けた地区担当の役人によって対策が打ち出された。

波照間ではピラチのウガルの西方は白保へ、ピラチのウガルの東より前村の前野家の西の道より以西は大浜へと区分されて、移住が強制されたのである。この移住の年代と人口は記録により明白である。

この時代、百姓には姓が許されず、居住する屋敷名と名前は直系尊属の名を踏襲し、それがない場合は、傍系にわたり妻方の關係者の名を受け継いでいたために、大浜と白保には屋敷名と名前は同一であるが、言葉の方は白保は母島波照間そのままであるが、なぜ大浜は違つたのかとの疑問がある。私はこれに関して、白保は生き残った人が二十余人で、波照間からの移住民が四百二十余人であつたために、二十余人がもとの白保言葉では四百余人の移住民に通ぜず必然的に多方に引きずられたためであり、大浜は

生き残った人が三百余人あり、波照間からの移住民四百二十人に對して三分の一を占めたために大浜の元から的人は大浜語を使い、波照間からの移住者は波照間語を使っていたのが、お互いに相手の方の言葉も覚えて意志の疎通をしているうちに、歳月が流れるに従い両語の混成語となり、石垣や近隣の村の言葉の影響も受けて変化したものであろうと考えている。

白保や大浜の人々の骨格が今日でも似ており、勤勉さ等の性格もよく似ているが、各地の生活環境の影響を受けて時代とともに次第に変わっていくであろう。

何故に大浜村には元村の人が二百人余も残っているのに、波照間から四百余人の大勢の人を移住させたか疑問であるが、大浜村の背後には広い農耕地があるので、これを維持するために勤勉性の高い波照間を選んだことが察せられ、白保も同様觀点から広大な農耕地の維持が目標であつたと思われる。

なお、大浜も白保も移住民の屋敷が海岸近くに求められているのを見ると、波照間は當時、農耕と漁獲の併用が盛んで、移住先でも海に出やすい所を選んだものと考えられる。

また、何故に東方面を残して、西方面を移住させたかについては、当時の役人の妻女（マカナイ）が東村の出身であつたために、妻の肩を持つたからという伝説がある。この移住により島の人口は三分の一に減少したのである。

高等弁務官の贈り物

本土復帰前のアメリカ統治下の沖縄にあって高等弁務官は、絶対的権力を保持し、琉球政府の行政主席の任命権を持ち、立法、司法、行政に多大な影響を及ぼした。それゆえ「帝王」の異名があり、絶対的存在として君臨していた。高等弁務官制度が発足したのは一九五七年（昭和三二のこと）だが、一九六一年（同三六）には第三代高等弁務官にキャラウエイ中佐が就任した。

キャラウエイ高等弁務官は「沖縄自治神話論」をぶちあげ、沖縄人民の民主的な自治権獲得を否定するなど、「キャラウエイ旋風」を巻き起こした人物だが、島々には足繁く訪問し、民情を観察するなど、二つの顔があつた。南大東島では島の土地問題を解決した功労者として銅像も建立されている。八重山には就任後の八月十八日、初視察に訪れている。小浜島には翌日十九日に足を運んだが、その時、島の婦人会からミシン寄贈の要請を受けて快諾し、九月に入つてミシン二台を贈呈している。

写真は、小浜島の住民との懇談会の席上で、要請文を読み上げる婦人会長の嵩原トミさんと、これに耳を傾けるキャラウエイ高等弁務官、そして関係者のみなさんを撮ったもの。背筋をピーンと伸ばし、緊張した表情の嵩原会長、穏やかな面もちで聞き入る高等弁務官。張りつめた中にも、穏やかな雰囲気が漂う。

ミシンの贈呈式は町役場を通じ、九月二十六日に小浜公民館で行われた。当時、ミシンは高価な衣服縫製の機器だつた。



ミシン贈呈の要請文を読み上げる嵩原会長（左）とキャラウエイ高等弁務官（右）

下田原貝塚



島の北海岸近くに広がる下田原貝塚

波照間島の北海岸に広がる大泊浜から内陸部におおよそ百数メートル入った砂土壌の平地に形成された県指定史跡の貝塚である。発掘調査は一九五四年（昭和二九）、金関丈夫・国分直一・永井昌文・多和田真淳らの各氏が取り組んだのを嚆矢とし、次いで、一九五八年（同三三）、早稲田大学八重山学術調査団が行つた。このときの調査結果は、「沖縄 八重山」と表題する冊子にまとめられており、貝塚の年代を位置づける画期的な「早稲田編年」を提示し、注目を集めた。

その後、一九八三年（同五八）から一九八五年（同六〇）にかけて第三次にわたり県教育委員会による発掘調査が実施され、貝塚の全貌がほぼ明らかになった。調査の結果、柱穴が数多く検出されたほか、炉跡、溝状遺構が見つかった。遺物は骨製品、貝製品が豊富であり、石器類では尖頭器類がかなり検出された。また、器壁が分厚く、把つき付けて内彎する浅鉢の土器が出土したこと。これは沖縄本島や九州などの北方の土器文化ではなく、南方の土器文化の流れを汲んでいると言われる。この土器は「下田原式土器」と命名され、貝塚の特徴を表している。

貝塚は、放射性炭素による年代測定の結果、おおよそ今から三七〇〇年前の遺跡といわれ、大田原貝塚（石垣島）、仲間第二貝塚（西表島）と同じく八重山で最も古い遺跡に数えられている。

美底御嶽



北部落にある美底御嶽

波照間島には、森林を形成して原初的な御嶽の形態を残すビテヌワー（野原の御嶽）が三カ所と、そのビテヌワーと結びつく集落内にあるウツヌワー（内の御

嶽）が五カ所、それに多数の拝所があり、島の人々に尊崇されている。美底御嶽はウツヌワーのひとつで、ミシクワードと呼ばれる。御嶽は北部落の北はずれにあり、周囲には農耕地が広がる。

八重山の御嶽は、石積みが嶽域を開み、正面に鳥居が建ち、これをくぐると嶽庭が広がり、その中に拝殿があり、後方に最も神聖なイビが形づくるという構造が一般的である。しかし、波照間の御嶽には鳥居はない。ビテヌワーは森林に覆われ、人工的な施設ではなく、香炉も置かれていらない。神司は、入れることを許された年三回のミヤクツエなどでは決められた場所で祈りを捧げる。

ウツヌワーはビテヌワーの遙拝御嶽といわれ、美底御嶽は白郎原御嶽といふ。御嶽には入り口が二カ所あり、瓦ふきのワーヌヒー（拝殿）が建つ。その内部に祭壇が置かれている。少し進むと、イビの前に相当するベツツアヒー、そしてマソーミ（イビ）がある。マソーミは真正面の意味で、ビテヌワーとの結びつきを示している。マソーミには神司と祭

祀集団の女性だけが入れる。そこには香炉が二つ置かれている。一つは白郎原御嶽へのお通しの時に使われ、もう一つは西表島東部の古見の美与底という古い村と関係があるといわれる。美底の地名も古見と関わりを持つと伝わる。

マソーミのそばにはブアッティー（東田家）の庭があり、そこにも二つの香炉がある。御嶽は、群雄割拠時代（十五世紀後期）に島民の信望を集め、後にオヤケアカハチの手下に殺害された明宇底獅子嘉殿の住居跡だといわれる。未詳だが入り口近くに石積みの古墓跡が残る。御嶽の西方には神井戸が二つあり、一つは美底御嶽で祭祀の時に使われ、もう一つは富嘉部落にある阿底御嶽へのお通しの井戸だといわれる。

『琉球国由来記』にある白郎原御嶽の遙拝御嶽であるため、同記には載っていない。トウニムトウは東田家で、神司は同家の関係者が務め、連綿と繼承されている。現在は引退した底原マサの後を受けて、白保ミチ子がその要職にある。御嶽は、豊年祭など祭祀の場となる。

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等
から寄贈を受けております。
あわせてお礼申し上げます。

岩田書院	地方史情報	52
沖縄国際大学	地方史情報	53
沖縄国際大学	地方史情報	54
沖縄国際大学	三十年史 本編	資料編
宮城学院女子大学	琉球の方言	2002年度
那覇市議会	沖縄研究ノート	12
与那国町役場	沖縄国際大学	琉球の方言
沖縄国際大学	沖縄の方言	27
沖縄国際大学	沖縄の方言	27
那覇市議会史 第5巻	沖縄研究ノート	12
町史第一巻「交響する島宇宙」	沖縄研究ノート	12
八重山、竹富町調査報告書 4	沖縄研究ノート	12
清代福建省地方官年表 金城正篤編	沖縄研究ノート	12
「明清檔案」琉球関係資料	沖縄研究ノート	12
歴代宝案 校訂本 第一冊	沖縄研究ノート	12
歴代宝案 校訂本 第二冊	沖縄研究ノート	12
歴代宝案 校訂本 第三冊	沖縄研究ノート	12
歴代宝案 校訂本 第四冊	沖縄研究ノート	12
歴代宝案 校訂本 第七冊	沖縄研究ノート	12
歴代宝案 校訂本 第十一冊	沖縄研究ノート	12
歴代宝案 校訂本 第十三冊	沖縄研究ノート	12
宮古古諺音義	沖縄研究ノート	12
渋谷書言大学事務局	沖縄研究ノート	12
具志川市教育委員会	沖縄研究ノート	12
城辺町教育委員会	沖縄研究ノート	12
城辺町史 史料5 加治道部落沿革史	沖縄研究ノート	12
人頭税廃止百周年 宮古藏元	沖縄研究ノート	12
人頭税廃止百周年 人頭石	沖縄研究ノート	12
具志川市史だより 第17号	沖縄研究ノート	12
具志川市史第四卷 移民出稼ぎ 論考編	沖縄研究ノート	12
具志川市史第四卷 移民出稼ぎ 資料編	沖縄研究ノート	12
具志川市史第四卷 移民出稼ぎ 証言編	沖縄研究ノート	12
具志川市史編集史料 13 写真集 南洋群島の製糖とくらし	沖縄研究ノート	12

沖縄大学

沖縄大学地域研究所 年報 17

公團海洋博覽會記念
團體管理財團

首里城公園

沖縄大学地域研究所 所報 28

首里城物語 首里城が楽しく学べる

沖縄県平和祈念資料館

児童・生徒の平和メッセージ展

金龍五色之雲 —復元の肝心—

沖縄県平和祈念資料館

年報第2号

ひめゆり平和祈念資料館
館報 第14号

沖縄県平和祈念資料館

ワークブック

感想文集 ひめゆり 第14号

小湾字誌編集委員会

小湾写真集 よみがえる小湾集落

具志頭村歴史民俗資料館
年報

沖縄県公文書館研究紀要

だより 4

南風原文化センター
紀要 8号

古地図にみる琉球

空から見た昔の沖縄II

豊見城市教育委員会
宜保アガリヌ御嶽

史料編集室紀要

第28号

西原町史 第7巻資料編 6

琉球・中国・日本・朝鮮 年代対照表

浦添市立図書館 紀要 14

沖縄県史資料編16女性史新聞資料明治編

北谷町史編集事務局
読谷村役場

嘉手納町教育委員会
読谷村の戦跡めぐり

沖縄県史たより

第12号

石垣市役所

嘉手納町史 資料編 6 戰時資料

歴代宝案の葉

(英語版)

石垣市史叢書 索引 I

歴代宝案の葉

ぐくくべの方言語彙 上

八重山関係文献目録 自然編

宜野湾教育委員会

宜野湾市史第9巻資料編8自然・追録編

自然とヒト

三木 健

八重山研究の歴史

近世琉球の租税制度と人頭税

城辺町教育委員会

人頭税資料展 人頭税廃止百周年

平成14年度沖縄県における地域歴史書

（財）南西地域産業活性化センター

刊行事業の成果とその意義

沖縄国際大学南島文化研究所

沖縄国際大学南島文化研究所

近世琉球の租税制度と人頭税

35

業務日誌

◆二〇〇三年（平成十五年）

・第十一巻資料編「新聞集成V」全原稿最終校正完了。グローバル企画印刷㈱に印刷製本を指示。

二月二一日

- ・第十一巻資料編「新聞集成VI」編集業務に着手。「八重山タイムス」「八重山毎日新聞」「八重山朝日新聞」の竹富町関係記事点検。

二月二四日

- ・町史だより第23号編集。仲本信幸遺稿文字入力及び編集。
- ・坂本要氏（東京家政学院筑波女子大学教授）、竹富町の念佛行事調査のため来室。

二月二六日

- ・北條芳隆、河野裕美（東海大学）の両氏、網取村跡の考古学的調査（発掘）に向けて表敬訪問。

二月二八日

- ・第十一巻資料編「新聞集成VI」編集。昭和三六年～同三九年記事、第一次選択及び収録記事の時系列配置検討。

三月四日

- ・町史だより第23号編集完了。印刷製本随意契約締結に向けて印刷業者から見積もり微収。

三月六日

- ・大塚淑夫氏（東海大学）、網取村の考古学的調査（発掘）に向けて表敬訪問。

三月七日

- ・第十一巻資料編「新聞集成VI」収録記事選定に向けて、第十一

- ・宮良作氏（元県議会議員）、八重山戦争マラリア資料収集のため来室。
- ・第十一巻資料編「新聞集成V」印刷製本最終チェック、ページ設定のため、南風原町のグローバル企画印刷㈱へ職員一人出張（二泊二日）
- ・二月一〇日
- ・第十一巻資料編「新聞集成V」昭和三一年～同三四年最終校正及びページ設定、卷頭校正。
- ・二月一四日
- ・第十一巻資料編「新聞集成V」卷頭、卷末最終校正及びページ設定終了。
- ・二月一七日
- ・本田昭正氏（町史編集委員）より仲本信幸遺稿集（波照間島関係資料）寄贈。
- ・二月一八日
- ・行政文書分類整理編纂業務、南山舎に業務委託。職員一人対応。
- ・二月一九日
- ・二月二〇日

卷小委員会委員に選択記事を送付。

・町史だより第23号印刷製本、(有)八島印刷と契約締結。

三月一一日

・第十一卷資料編「新聞集成VI」収録記事選定に際しての記事評

価委託契約、第十一卷小委員会と請書交わす。

三月一二日

・「島じま編」編集。島との調査項目及び日次の検討。

・高良勉氏(県公文書館)、波照間島調査に向けて来室。

三月一三日

・行政文書分類編纂整理業務終了(南山舎)

・「島じま編」編集。竹富島編、黒島編、小浜島編の調査項目検

討。

三月一四日

・沖縄県地域史協議会二〇〇二年度第三回研修会(於・県公文書

館)職員一人出張。

・第十一卷資料編「新聞集成VI」収録記事評価表、吉川安一委員

より送付。

三月一七日

・第十一卷資料編「新聞集成VI」収録記事評価表、玉城功一委員、

本田昭正委員、池城安伸委員より送付。

三月一八日

・「島じま編」編集。黒島編、波照間島編の調査項目検討。

・町史だより第23号初稿。

三月一九日

・町史だより第23号印刷製本、(有)八島印刷へ指令。

三月二四日

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討。

・第十一卷資料編「新聞集成VI」収録記事選定作業。

三月二五日

・「島じま編」編集。黒島編の調査項目検討。

・第十一卷資料編「新聞集成VI」収録記事選定作業。

三月二六日

・「島じま編」編集。黒島編の調査項目検討及び波照間関係資料

収集。

三月二八日

・「島じま編」編集。鳩間編の調査項目検討。

・町史だより第23号、(有)八島印刷より納本。

四月二日

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討。

四月三日

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討。

四月四日

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討及び資料収集。

四月七日

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討及び資料収集。

四月八日

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討及び資料収集。

四月九日

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討及び資料収集。

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討及び資料収集。

四月一〇日

・第十一巻資料編「新聞集成VI」収録記事評価表、第十一巻小委員会の十一全委員より提出済み、収録記事集計完了。

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討及び資料収集。

四月一四日

・第十一巻資料編「新聞集成VI」収録記事点検作業。

四月一六日

・第十一巻資料編「新聞集成V」発刊について記者会見。

四月一七日

・第十一巻資料編「新聞集成VI」収録記事決定。

四月一八日

・第十一巻資料編「新聞集成VI」収録記事の主見出し、中見出し、小見出しの検討。

四月二五日

・平良市史の辻井英子氏来室。「海南時報」「八重山新報」二十
八冊借用。

四月三〇日

・平成十五年度区長会議。町史編集室の編集体制及び事業計画等
を区長に説明。

五月一日

・人事異動発令。銘里君夫室長、税務課長へ、古堅廉太郎税務課
長、町史編集室長へ異動。

五月六日

・「島じま編」編集。波照間島編の調査項目検討及び資料収集。

五月八日

・「島じま編」編集。竹富島編の調査項目検討及び資料収集。

五月九日

・「島じま編」編集。鳩間島編の調査項目検討及び資料集。

五月一五日

・国指定史跡「下田原城跡」探索会参加のため、波照間島へ職員
一人日帰り出張。

五月二二日

・大原在の西大舛高壹氏来室。上地島で発見した銅鏡について報
告およびコピー資料を寄贈。

・第十一巻資料編「新聞集成VI」凡例作成。

五月二四日

・第二巻竹富島編専門部会及び講演会、竹富島まちなみ館で開催。
専門委員に狩俣恵一氏（沖縄国際大学教授）委嘱。

五月二六日

・第十一巻資料編「新聞集成VI」凡例作成完了。

・「島じま編」編集。竹富島関係資料収集。

五月二八日

・八重山地域史協議会二〇〇三年度定期総会及び懇親会。役員改
選あり、石垣市史編集課が事務局担当。

五月二九日

・第十一巻資料編「新聞集成VI」編集。竹富町関係年表作成（昭
和三六年）。

・「島じま編」編集。竹富島関係資料収集及び整理。

五月三〇日
・第十一巻資料編「新聞集成VI」編集。竹富町関係年表作成（昭和三六年）。

六月一七日
・町制施行55周年記念誌編集。平成14年歴史年表作成。

六月一九日
・町制施行55周年記念誌編集。平成15年歴史年表作成。

六月二〇日
・第十一巻資料編「新聞集成VI」竹富町関係年表作成（昭和37年）。

六月二四日
・沖縄県地域史協議会二〇〇三年度総会及び研修会、首里公民館で開催。職員一人出張。「新聞集成V」の発刊について報告。

六月二七日
・第十一巻資料編「新聞集成VI」印刷製本に向けた指名競争入札説明。

六月三〇日
・第十一巻資料編「新聞集成VI」印刷製本指名競争入札。鹿児島リコー沖縄営業所、グローバル企画印刷、沖縄高速印刷、丸正印刷、八島印刷、文進印刷、光文堂印刷の七業者を指名。沖縄高速印刷株落札。

六月二日
・町制施行55周年記念誌編集。平成12年歴史年表作成。

六月一二日
・町制施行55周年記念誌編集。平成11年歴史年表作成。

六月一〇日
・寄留簿、住民福祉課から町史編集室に移管。

六月六日
・町制施行55周年記念誌編集。昭和46年（同54年歴史年表作成）。

六月五日
・町制施行55周年記念誌編集。昭和55年（平成2年歴史年表作成）。

六月七日
・町制施行55周年記念誌編集。平成3年（同10年歴史年表作成）。

六月一〇日
・町制施行55周年記念誌編集。平成11年歴史年表作成。

六月一二日
・町制施行55周年記念誌編集。平成12年歴史年表作成。

六月一六日
・町制施行55周年記念誌編集。平成13年歴史年表作成。

五月三〇日
・町制施行55周年記念誌編集。平成14年歴史年表作成。

六月一九日
・町制施行55周年記念誌編集。平成15年歴史年表作成。

六月二四日
・沖縄県地域史協議会二〇〇三年度総会及び研修会、首里公民館で開催。職員一人出張。「新聞集成V」の発刊について報告。

六月二七日
・第十一巻資料編「新聞集成VI」印刷製本に向けた指名競争入札説明。

六月三〇日
・第十一巻資料編「新聞集成VI」印刷製本指名競争入札。鹿児島リコー沖縄営業所、グローバル企画印刷、沖縄高速印刷、丸正印刷、八島印刷、文進印刷、光文堂印刷の七業者を指名。沖縄高速印刷株落札。

編集後記

◆『竹富町史だより第24号』を発刊しました。本号は、前号に引き続き本田昭正氏（町史編集委員）が町史編集室に寄贈した仲本信幸氏の遺稿集「波照間島の歴史・伝説考（一）」を中心に編集しました。それに今年三月に発刊した第十一巻資料編「新聞集成V」の紹介、「写真に見るわが町」「文化財探訪」「聖地めぐり」を盛り込み、町の歴史を知る手立ての一冊としました。

◆「波照間島の歴史・伝説考」を前号で紹介した時、各方面から反響がありました。「波照間島にそういう歴史があつたのか」「島の伝説をあれこれ聞いていたが、初めて知る」とが多かったなどの声が聞かれました。

◆仲本氏は竹富町長を務めた政治家であり、水産業に尽力した経済人でもあり、それに薬草研究家でもありました。編集資料に目を通していると、波照間島の歴史・文化等に精通した博学者であり、後世の研究に道を開き、多彩な資料を我々に提示しています。（通事）



平成15年9月30日発行

竹富町史だより

第24号

編集発行 竹富町役場町史編集室

沖縄県石垣市美崎町2番地大和ビル2F東

☎ 0980-82-9985